

特集1

地域の学校にかかわり 教育と研究を問い直す

—その実践と思想—

特集2

あらたな交流を生む シートン生誕150周年記念「大哺乳類展」

—国立科学博物館(東京・上野)



都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

子ども理解のカリキュラムを創る試み



田中孝彦氏の最終記念講義。2010年2月3日

—A・クラインマン

『病いの語り』から得た示唆

田中孝彦

私が担当してきた臨床教育学のゼミナールで、学生・院生たちとくりかえし読んできた本の一冊に、アメリカの精神科医で医療人類学 (clinical anthropology) の開拓者のアーサー・クラインマンの『病いの語り』 (Arthur Kleinman, The illness narratives, 1988、江口重幸ほか訳『病いの語り』、誠信書房、1996年) があります。発達援助職と教師の専門性の問い直しと、教師教育の改革を考える上で検討すべき重要な研究と考えて、みなさんにご紹介します。

この本の中で、クラインマンは、慢性的「病い」を抱える人々の治療・援助の実践に基づいて、次のようなことを記しています。

i) 「疾患」 (disease) と「病い」 (illness) とを区別する必要がある。「疾患」とは生物学的・生理学的な器官・機能の問題である。これに対して、「病い」は、人々が「疾患」を抱えて生きる人生の全体的経験 (whole experience) である。それ

は、「疾患」による障害の発生と生活能力の低下、社会の側からそれに対して烙印(stigma)を押される体験、それらによる生きることへの士気(moral)の低下、そうした困難を抱えながら生きる人生の意味の絶えざるとらえ直しと周囲の人々との関係の結び直しの努力などを含んだ、一人ひとりの人間に固有な経験である。

ii) 「疾患」を抱え、「病い」を得た人々は、それらを含んだ自分の人生の意味をくり返し考え、語り、意味づけ直しながら生きていく。したがって、治療・援助に携わる医者・医療従事者たちにとっては、治療や援助の実践を全体的に構想する上で、患者と患者を支える家族など身近な人々の「病いの語り」(illness narratives)に耳を傾け、語りの記録(mini ethnography)を作り、それらを読みかえし読んで理解を深めていくことが、決定的に重要な作業となる。それは、医者や医療関係者には、貴重な人間的訓練(moral lesson)を受

ける機会となる場合が多い。

iii) 現代の医療は、生物医学的(bio medical)な医療を軸として高度な発展を遂げている。だが、それは「疾患」の除去に関心を集中しがちであり、患者の「病いの語り」に耳を傾け、そこから彼らが必要としている援助的・医療的实践を全体的に構想すること、彼らの人生を支える物語を共に紡ぎ出していくことには、著しく不得手になっている。また、患者を日常の生活において支えている家族や身近な人々の語りに耳を傾け、それらの人々をエンパワー(empower)することへの関心も薄くなりがちである。

iv) 患者と患者を支える身近な人々の「病いの語り」に耳を傾けることを医療の中核に位置づけ直し、日常的な医療の質とその地域的・社会的システムを全体的に作り変えなければならぬ。そのため感性と力量を持った医者や医療従事者を養成・訓練するという方向で、医療の専門家の養成・教育の内容を根本的に改革することが必要である。

クラインマンは、このように考えて、この本の結論部分で、「医学のトレーニング・プログラムを上から下まですっかり組み立て直すことが必要である。」「病いの経験についての患者や家族の語りを教育課程においてもっと中心的なものにすることが必要である。」「カリキュラムにおいて、病いの語りをどのように解釈し、病いの経験をどのように評価するのかを学生に教えることに時間が充てられなければならない。」と述べて、医者をはじめとする医療の専

門職を育てる医学教育の改革の必要性を提起しています。

この本を読んだ学生・大学院生たちから出されてきた感想は、次のようなものです。

「患者と患者を支える身近な人々の生活史・実践史の語りに耳を傾けるという態度・方法(narrative method)が、医療の領域、とくに慢性の病いを得た患者の治療・援助の領域で重視されるようになってきていることを知った。」「生存・成長の当事者の生活史の語りを聴きとり、そこから彼らが必要としている援助・教育の実践を構想するセンスと能力を育てることが、医療の領域でも、福祉や心理臨床など他の人間発達援助の領域でも、専門職の養成・教育の重要な方向になっていることを知った。」「それは、教育の領域や教師の養成・教育においても重要になっているように感じた。臨床教育学の開拓の試みが、そうした現代の人間発達援助専門職の専門性の問い直し、その養成・教育の問い直しの、共通の動きのなかにあることに気づいた。」

私は、都留で働いてきた7年の間に、クラインマンの『病いの語り』に結晶した医療人類学の試みから示唆を得、またそれに対する学生・院生たちの反応に刺激されてきました。その結果、子どもたちの生活の表現・語りに耳を傾け、子どもたちの生活史をなぞり、子どもたちが必要としている援助や教育を構想する感性と能力を育むことができるような、「子ども理解のカリキュラム」を創り出し、それを教師の養成・教育の過程に位置づける必要があると思うようになったのです。

(たなか たかひこ・本学初等教育学科教員)



地域の学校にかかわり 教育と研究を問い直す

—その実践と思想—

大学教員や学生たちが地域の学校にかかわっていくさまざまな実践が行なわれ、子どもたち、教師、父母、住民、教育委員会などとの信頼と協力の関係を築いてきています。SAT（学生アシスタント・ティーチャー）は都留市内ではすっかり定着し、国内外の教師養成の思潮と交流しながら、探究実践は一段と深まりつつあります。光ファイバーを使った遠隔

授業の実験的実践が重ねられていますが、影絵劇の上演ということで、学内の児童文化研究部の学生たちも参加・協力しました。都留市の学校との協力関係は、『都留市環境副読本』としても結実しました。こうした、地域の自然や子どもたちと交流していくことの内的な意味を探る資料として、大田堯先生の著書の抜粋を掲載しました。

特色GP

「地域を基盤とする教師養成教育プログラムの開発」と 学生アシスタント・ティーチャー（SAT）の拡充 取り組みを振り返って

佐藤 隆



フィンランド・オウル大学カヤーニ校での学生たちによる授業づくりの一コマ

地域に根づいたSAT

平成19年度から3年間行なってきた特色GP「地域を基盤とする教師養成教育プログラムの開発」は最終年度を迎えています。この取り組みは、都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティーチャー（SAT）を派遣し、学習支援、「学力不振」「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を学生に体験させることにより、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力をもつ教員養成の深化・発展を図ることを目的とするものです。

これらの運営にあたっては都留市SAT運営委員会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行なってきましたが、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育の柱として位置つけてきました。

以上の取り組みで、SATが市内全域に広く認知され、教育関係者だけでなく、保護者・住民などにも高い評価を受けるようになってきました。地域のなかで大学と学生への親しみを強める効果をもたらせたように思います。さらにその波及効果として、富士東部地域や南都留郡および県内全域でのSATの認知と同様な試みの模索も始まってきました。

SATの拡充

プログラム開始当初、市内各小中学校でのSATの活動は、小中学校の放課後および長期休業中における小グループでの学習支援を行うもの（Aタイプ）と、学力不振・不登校傾向・多動・障害等による困難をもつ子どもを対象に個別的な支援や当該児童生徒のいる学級での補助的な活動を行なうもの（現在のCタイプ）の二つのタイプのものを想定していました。

さらに、昨年からは、授業中を含めた子どもへの学習支援をおこないつつ、学習指導の力量向上をめざすBタイプの設置を行っています。このことにより、今後重視されることが予想されるティーム・ティーチングによる教師間連携の実習を行うとともに、Cタイプの活動をより本来的な目的に近づけることができました。

教師教育についての国際的な動向への関心

これらの取り組みの基盤となった発想は、臨床的知見と地域に根ざした教育のあり方を、教師教育のプログラムにのなかに組み込むことでした。そして、そのそれぞれについて先駆的な取り組みを行っている国内・海外の大学のプログラムに学ぶことを重視してきました。国内にあつては、福井大学の地域と一体になった教師教育プログラムの

取り組みを、また北海道教育大学の臨床教育学と教師教育の結びつきを学ぶことができました。

さらに、これらの研究の過程で、フィンランド・オウル大学カヤー二校が同様な問題意識に基づく教員養成教育を進めていて、「生の子どもの姿」に触れ、「子どもの語りの聞き取り」を軸にした教育実習システムを構築していることに接してきました。また地域にある小中高校を実習体制のなかに組み込み、現職教員を一時的に大学のスタッフとして迎えることを通じて、教育実践と研究の融合をはかるなどの教員養成を意図的に行なってきたカナダ・サイモンフレーザー大学の試みもおおいに参考になりました。両大学とは研究的な交流を行なってきましたが、この交流についてもより本格的なものとして展開し、本学における学生の学習意欲の向上と、国際的な水準をふまえた教職の専門性の追求をめざしていきたいと思います。

SATだより

実践と理論の往還をめざして

この3年間で、とりわけ重視してきたのは、学生の「子

ども体験」の深化をはかるために、ポートフォリオ（一人ひとりの総合的な経験資料ファイルのようなもの）としての「活動の記録」の蓄積をおこなってきたことです。またこれらの記録を素材としながら、大学での授業の「学校参加」「臨床教育学フィールドワーク」を展開してきました。SAT活動と並行して行なってきた大学での授業は、A/Bタイプに対応する「学校参加」、Cタイプに対応する「臨床教育学フィールドワーク」が行われてい



SAT-Bの活動

ます。このことを通じて学生が自らの「子ども体験」「学校の現実」を反省的に理解する機会を保障できているように思います。

すでに述べたように、この活動の特色は、教育実習とは異なる観点での実地体験にあり、フォーマルな関わり方ではなく、また授業研究中心というよりは、日常の子どもの姿に触れるという意味での別な角度からの「子ども体験」ができていくように思われます。

また、授業のなかでは、自らの体験を理論的に検討することを意識しており、活動を通しての「困り感」「うまくいかない」「学校の難しさ、忙しさ」などが出され、すぐには解決できないが、考えてみることの重要性を学生が理解し始めています。また、学校ごとの違いの交流が行われ、先進的な事例を自分の担当している子どもとの関係のなかで実現できるかどうかの検討も行われるようになってきたことも重要なことだと考えています。

学校でのSATの活動のようす

都留市SAT運営委員会

「2008年度の成果と課題」より

次に実際の活動場面である学校のなかで、学生たちがSATの活動を通してどのようなことを感じ、また学んできたのか、また、その活動を通して学校にどのような影響をもたらしている

のかについて、毎年行っている都留市SAT運営委員会での研究資料「2008年度の成果と課題」よりいくつかの学校の報告を抜き出しておきます。たとえば都留文科大学附属小学校では、SATの学生たちについて、次のように評価してくれています。

「前期は主に、授業のT2（ティーチングのなかでの補助的教員）として児童の中に入って個別支援の必要な児童に指導に入ってもらった。そのことでつまづきをすぐに解消できて学習活動がスムーズにできるようになった子どももいた。着席しての学習が苦手な児童にとっては一対一の対応が可能になり、実態に合った指導ができた場面も数多く見られた。若くて親しみやすいお姉さん先生・お兄さん先生といった感覚で関係が作られ、和やかな雰囲気の中で学習が進められたように思える。さらに後期には、クラスを二つのグループに分けて、担任とSAT学生が別の授業を展開する形態をとった。少人数になったことやすぐに評価してもらえること、教材が興味を引くものであったことなどから楽しんで授業に参加する児童の姿が見られた。いずれもSAT学生の時間が許す限り、学校にいてくれ、休み時間には一緒に遊んだり掃除も共に作業してくれたり、新鮮な空気が学校に入り込み児童の意欲を引き立ててくれたように感じられた」。

一方、宝小小学校でSATを体験した学生からは、「1学期からSATでお世話になり、授業中の子どもたちの様子から、本当にたくさんのお話を教えてもらいました。週1回ではありましたが、子どもたちのいろいろな面を見ることができたと思います。授業中だけでなく、休み時間や給食、掃除等、本当に一日中子どもたちの様子を見て指導されている先生方の姿から、現場でしか学べないことをたくさん教えていただきました。大学での勉強も勿論大事ですが、実際に子どもたちとふれあわなければ分からないことがたくさんあります。まだまだ勉強不足ですが、SATを通して少しは成長できたと思います。」

「縦割り班活動や運動会の応援、支援、行間の活動等、教育実習では経験できない、学校の年中行事ともいえる様々な活動に参加できました。そこに関わる先生方の指導や子

どもたちの様子を知るだけでなく、1年間を通して同じ子どもたちに関わったので、関係も深まり、「コミュニケーションをはかることができた。」などの感想も寄せられています。いずれにしても、ただ活動をするだけでなく、そこでの体験をどのように理論的な問題と結びあわせ、自分なりの教師像を描いていけるのか、今後の課題となっています。

（さとう たかし・本学初等教育学科教員）



SAT-Aの活動

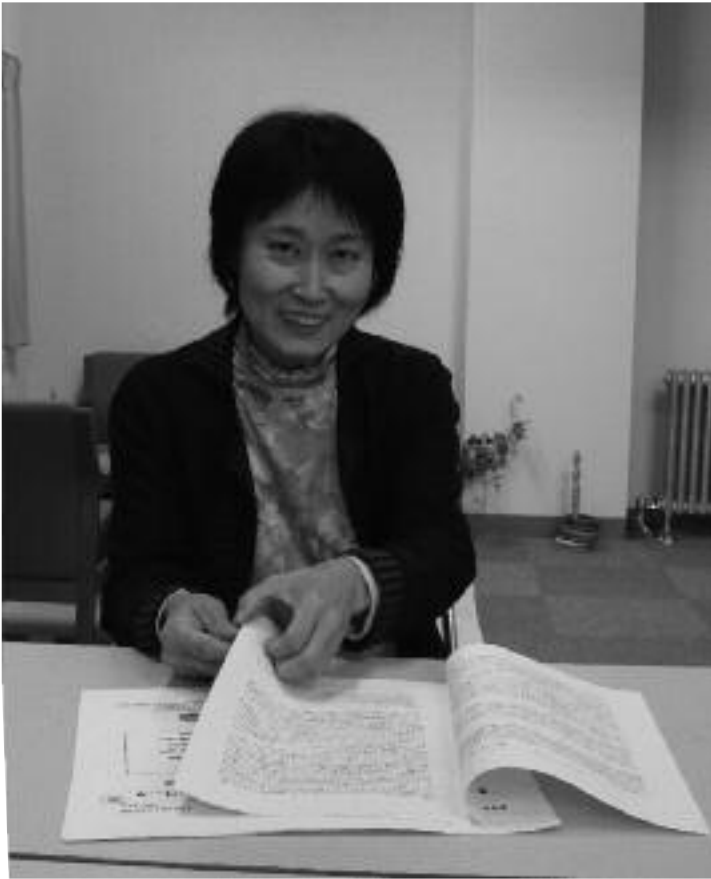
臨床教育学フィールドワーク、5年目を終えて

筒井潤子

実習体験を深め合う、ケースカンファレンス

毎月第3水曜日6限。1号館208教室。20数名の学生と3名の教員が、テーブルを丸く囲んで、レポーターの学生の報告を聞きつつ頭をひねる。「これは本当に、発達障害かなあ。休憩時

間の様子はどうか?」「この子にとってSATの学生の果たしている役割ってなんだろうね。」「落ち着きがないっていう報告だけど、この子は、何かすごく不安を抱えているように感じるんですけど。」：臨床教育学フィールドワークのケースカンファレンスです。



ケースカンファレンスで使用した報告書とともに

臨床教育学フィールドワークが始まって5年が終わろうとしています。困難を抱える子どもとの個別対応を中心とした学校現場での実習。そして、そこで体験し感じたことを、共同で検討しあう大学でのケースカンファレンス。この2つが相互に絡み合いながら、この活動は展開し、年々深まりを見せてきています。今年も30名の学生が、この活動に参加しました。これらの学生も、毎年と同様に、「学校での自分一人の活動だけでなく、ケースカンファレンスで、自分の思いを検討しあい、共有し合えることが、この活動の魅力だ」と言います。学生にとってはマイナスと見えていた子どもの言動も、共同での話し合いの中で、学生との関係の深まりを示すものとして捉えなおされたり、ただ傍にいるということに無力感を感じ、何かしなければという思いに駆られていた学生が、傍に信頼できる人がいるということの子どもにとつての意味の大きさを再確認したりします。

現場での実習体験が重要視されている現在ですが、学生にとって実習体験

を本当に意味あるものとするためには、実習のしつぱなしではなく、それを大学に持ち帰って、相互検討すること、それなくしては、本当の実習とは言えないのではないのでしょうか。

学校現場とのより深い連携を目指して
昨年度より、SATBが誕生し、授業中の子どもたちへの支援が始まりました。それに伴い、臨床教育学フィールドワークは、SATCと名前を



特集1

地域の学校にかかわり教育と研究を問い直す

—その実践と思想—

変えると同時に、学校現場との連携をより深いものにし、個々の子どもに即した援助が可能となるよう工夫を重ねています。

活動開始前に個々の子どもの必要に応じた丁寧な学生の担当割り当てを始めました。また、学校現場のSAT-C担当教員と各学校担当の大学教員との随時の打ち合わせ。両者共同でのカンファレンスも少しずつ始まりました。それにより、学生は、自分の担当の子どもにより積極的、意欲的に関わるようになってきました。担当の子どもを援助することを中心におきつつ、その子どもがクラスの中で、学校の中でのような関係の中でどのような思いで生活しているのかを丁寧に感じ取っています。

また、この活動に関連して、学校現場のほうから、大学に子どもの援助に関する相談が持ちかけられるようにもなりました。ある学校では、保護者の方の了解の下、担当の学生も加わり、学校関係者、大学教員が一堂に会して、会議を持つことが出来ました。このように子ども理解を深めるための共同研究の可能性も生まれてきています。

これからの発展に向けて

とは言っても全てがうまくいっているわけではありません。子どもとの個別対応は、学生に時に大きな負担とな

ります。子どもの抱える困難さに巻き込まれてつらくなってしまったり、子どもの甘えが転じた攻撃性に傷ついたりし、それを学生が自分の責任だと感じ、その感情を一人で抱え込むといったこともおこります。また、学校現場の忙しさから学生が担任との意思疎通の時間が取れず、不安なままに子どもに関わらざるを得ないといったこともあります。それらの問題に早めに気づき、共にその不安の意味を考えあうことで、より子ども理解、自分理解、そして学校教育への理解を深くしてゆける援助をしてゆけることが大学教員に求められていることです。しかし、残念ながらまだまだそこまでは目配りが出来ていないのが現状です。

課題を挙げればきりはありません。けれども、何よりこの活動に参加してくる学生たちの意欲、問題意識には素晴らしいものがあります。それらをより生かし、より大きく育んでゆけるようこれからも工夫を重ねていきたいと思えます。

(ついで) じゅんこ・本学初等教育学科教員



遠隔交流授業の実施

杉本光司

発達援助部門の1分野であります「地域情報教育」プログラムにおける取組みの一つ、地域小中学校との遠隔授業も今回で5回目となりました。これまでは都留第二中学校、東桂小学校、宝

小学校に遠隔会議システムを設置し遠隔授業を行ってきました。今年度は、地域交流研究センターでの備品設置支援ということで、都留文科大学附属小学校に機器一式を設置いたしました。

今回の取り組みでは、附属小学校の6年生18名が、2月26日の「6年生を送る会」で、宮沢賢治の作品『やまなし』を影絵劇として上演することが決まり、その上演に向けて、大学生たちによる指導や助言を遠隔会議システムを通して受けるといふプログラムに決まりました。そこで、これまで数多くの影絵劇の上演実績をもっている、学内文化系クラブである、児童文化研究部の学生たちの協力を得ることができ、4号館の2階会議室と、附属小学校2階多目的ホールを結んだ遠隔授業を行なうことになりました。

まず、第1回目の遠隔授業は、2月10日の1時50分から2時35分までの授業で、「影絵とはどういうものか?」と

いうことで、大学生による実際の影絵劇の上演、仕組み、色の組み合わせ方、演出法、BGMの使用法等についての学習会として行いました。

第2回目は2月19日の3時から3時45分まで、1回目の学習会の後、自分たちで作った道具を使った影絵劇『やまなし』のリハーサルを見てもらい、台詞の読み方、効果音、場面転換の方法等を大学生たちから感想をもらったり、アドバイスをしてもらいました。この遠隔授業は、都留市情報教育研究会の研究授業として組み込まれましたので、市内の小中学校の情報担当教員もこの様子を見守りました。

子どもたちも、「緊張したけどだめになった」、「離れているのにすごい」、「楽しかった」等の感想も寄せられ、また、大学生たちにとっても、「非常に貴重な経験が出来て、楽しかった」という感想を聞くことが出来ました。

今後は、附属小学校での定期的な利用に向けて、子どもたちが簡単に操作することのできる新しいプログラムの開発が期待されています。

(すぎもと てるじ・本学情報センター教員)

特集1 地域の学校にかかわり教育と研究を問い直す —その実践と思想—





子どもたちへの贈り物「都留市環境副読本」

坂田有紀子

「都留市の子どもたちが地域の自然に親しむ入り口として、都留市独自の教材を作れないだろうか」

『都留市環境副読本（第1部）自然編』は、都留市教育委員会（環境教育研究委員会）と環境保全市民会議の呼びかけに都留文科大学が協力し、三者共同事業として平成20年7月～平成22年3月までの約1年半を費やして作成されました。

当初、都留市環境教育研究委員会の先生方と副読本の内容について意見交換をしていたときに、強く印象に残った言葉があります。それは「温暖化やグローバルな環境問題に関する情報は、インターネットやメディアを通していくらでも手に入るが、逆に自分たちの足元のことがわからない」というものでした。その背景には、自然に興味をもっていても自分で勉強する時間がないといった多忙な先生方の日常と、一定期間で勤務校が変わるためにその地域に不慣れな先生が少なからずいるという実情があるようです。小学校における環境教育では「自然」に親しむこと、「地域」をベースにすること、体験や経験を多く取り入れること、などが推奨されています。しかし、多くの先生方にとって「地域」と「自然」は、身近なようで実は遠い存在であることを私はこのとき初めて知ったのでした。

「子どもたちが、身近な環境につい

て楽しく主体的に学ぶための資料が必要」という先生方の想いを受けて、まず「地域の自然」「自然と人」をテーマにした副読本を作成しようということになりました。原稿は、都留市環境教育委員会の先生方が、日常の多忙な業務のかたわら、大変な苦勞をして執筆されました。本学からは、坂田有紀子と北垣憲仁、西本勝美、平林祐子、佐藤隆（敬称略）が監修者としてその作成をサポートしました。

出来上がった副読本には地域の自然や生きものたちの紹介、各学区の見どころ、人と自然との関係、生きものの保全活動の大切さなど、充実した内容が盛り込まれています。この本の作成をとおして、都留市にはすばらしい自然がまだまだたくさん残っていることを改めて実感すると共に、自然に寄り添いながら生きてきた人々の暮らしや歴史があること、そして何より熱意のある先生方が大勢いらっしゃることに感激しました。

子どもたちや地域の方々が、地域の自然に親しみ、人と自然の関係について考えるきっかけにこの副読本がなってくれることを祈ります。

（さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員）

私たちの地域交流センターの実践は、自然の観方や教育・教養論、学問論を含んで成り立っています。そうした思想的意味を問い続けていくための資料として、大田堯先生の講演記録の抜粋を掲載します。

大田堯 大学の一般教育について

——ミルの大学論とファアブルの学問観にかかわって——

(1989年)より抜粋

(中略)

『昆虫記』に学問観を読む

じつは、私はこの正月の休みに、ジャン・アンリ・ファアブル(1823～1915年)の『昆虫記』を読むのじつぶん時間をかけました。読み始めますとやめられないほど、この『昆虫記』は魅力的なものであることを、こんど読み直しまして、つくづく感じました。ファアブルはミルの同時代、ないし少し後の時代の人間であります

が、アカデミーの外にいた科学者であります。そのアカデミーの外側にいたファアブルの学問観を、もういっぺん私たちは、見直してみることが必要ではないかと思いました。というのは、ファアブルの学問は昆虫学でありまして、動物学のせまい一部門ともいえる専門領域であります。ですが、そのごく限られた専門分野の研究を通じて、いまふうにいいますと、自然と人類の共存といえますか、私たちがいま「どう生きるか」と考えるところの、地球

「私は、いちばん年上で、みんなの先生であった。」しかし、それ以上に仲間であり、友達だった。彼ら少年たちは燃えやすい心と楽しい空想等を持ち、われわれの好奇心をそそり、知識欲にかりたてるあの人生の春の潮に満ち満ちていた。」

こういう感性というものは、ファアブルが研究者であると同時にすばらしい教育者だったことを示していると思ふんですが、どうでしょうか。そういうことから『昆虫記』が始まるの野に出ていきそこでいろいろ動物との出会いから最初のパラグラフが始まるのです。いちいち名前をあげて書いています。そして、人間というのは、そうしたさまざまな生きものの鎖のなかの一環なんだという意味のことが美しい文章で書かれています。自然との共存共生の思想が19世紀半ばに、すではつきりと『昆虫記』の冒頭にうたわれているのです。このことは注目していいと思います。

最初のパラグラフのいちばん最後は、こういうことばで結ばれています。「単純で、素直で、生き物といっしょに暮らすことに心の底から喜びを感じるわれわれは、春の生命の目覚めという楽しい饗宴、バンクエットのうちに朝の何時間かを過ごそうと出掛けたのであった。」

『昆虫記』第二巻の「アルマス」のはじめのところ、ファアブルは昆虫になり代わって、他のアカデミーの専門研究者たちにこう言っています。

「あなた方は虫のお腹をさく。が私は、彼らが生きているままに研究する。あなた方は昆虫たちを何かこわいもの、ないしは、あわれなもののように考えている。が私は、虫と愛情をもってつき合っている。……あなた方は細胞や原形質を化学的研究の対象とする。私は、虫たちの本能の素晴らしい現れ方を研究する。あなた方は死んだものをほじくるようなことをするが、私は生きた生命を調べているのです。」と。また、真理というたいせつな枠はずれないようにしながら、なるだけわかりやすいことばを使うように努力をしています。という意味のことも書いているのです。こうして、あらゆる生き物の連鎖のなかで人間というものをとらえ直す。人間にとって昆虫がどうあるかというような考え方はなくて、一度人間という「ものさし」をとつ払ってしまつて、地球上の生き物として昆虫を見、人間を同じように見る。このようなスケールの非常に大きな学問観がここには表出されているのです。(以下略)

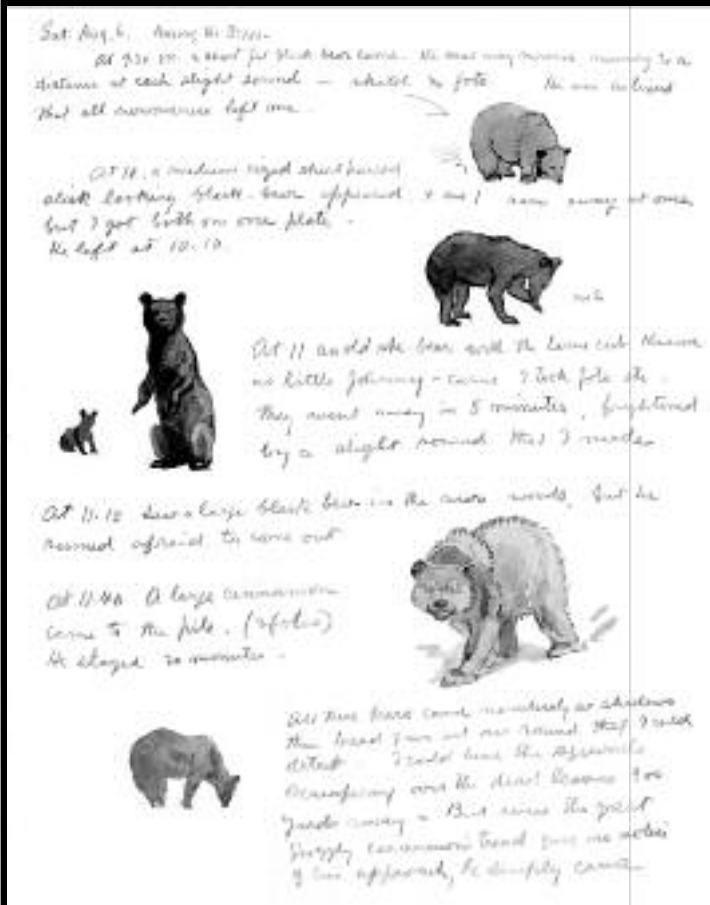
大田堯著『自分を生きる教育を求めて』一ツ橋書房、1993年、所収

あらたな交流を生む

シートン生誕150周年記念「大哺乳類展」

— 国立科学博物館 (東京・上野)

2010年3月13日 田中 6月13日 田中



シートンの日記1897年8月

いよいよ「大哺乳類展」の開催です。この企画展は、今泉吉晴氏（地域交流研究センター初代センター長）の監修によるもので、都留フィールド・ミュージアム（以下F・M）の実践・運動の蓄積と、今泉氏の著書・訳書（23頁）に結実しているシートンの再発見とを原動力として成り立っています。今泉氏にそのシートンの画期性を語っていただき、坂田有紀子氏に都留文科大F・Mの展示について紹介していただきます。そのF・Mの生きいきとした実践経験の一つとして、富士急行との連携事業をとりあげます。またF・Mを中核的に担い、「大哺乳類展」展示でも活躍している北垣憲仁氏の世界をインタヴューで紹介いたします。さらに、この「大哺乳類展」の開催によって多彩な交流が生れることも紹介いたします。特集の締めくくりには大田堯先生のインタヴューの後半を掲載しますが、都留文科大F・Mの課題や展望を示唆してまいります。（編集長）

ムリネモの森とは
森のグラフィックと中庭分



キツネ



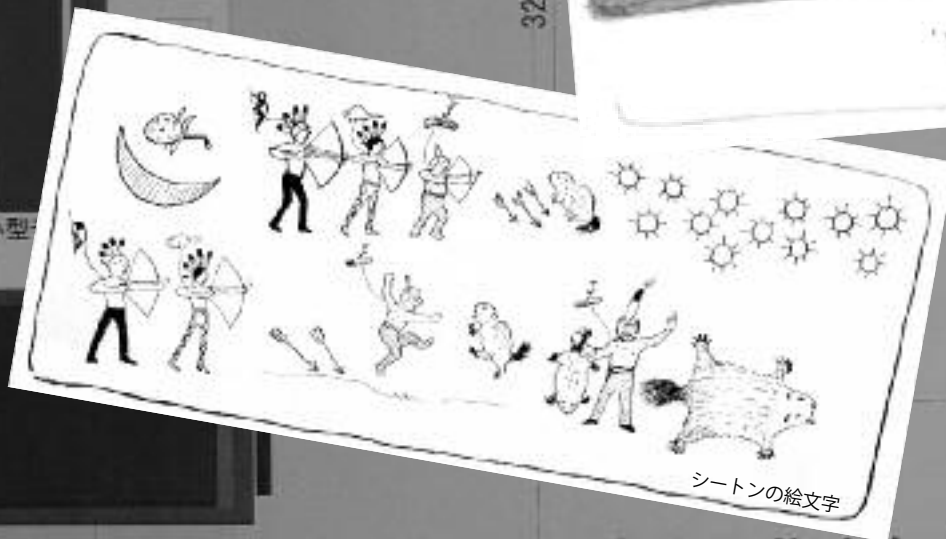
シロフクロウ

森からの便り

ムリネモの森



月に吠えるコヨーテ



シートンの絵文字

多彩な住人たち



ヒッコリーを埋めるハイイロリス



ハイイロリス



おやすみなさい

モグラのトンネル
モグラ
モグラたちの
ヒメズのトンネル
森に落ちていたヒメズ
0000
0000
0000
0000

3200

カモシカの食糧 (樹の標元)
ウサギの食糧 (樹の標元)
クマによってマーキングされた樹木

ニホンジカ(シルエット)

カモシカ(シルエット)

ウサギ(シルエット)

クマノワグマ(シルエット)

エドト

エドト

エドト

ヒメズ

動物

シートン生誕150周年記念『大哺乳類展』

シートンといえば動物画家の大家。そこで大作をもつてくる、という考え方がとられがちです。しかし、シートン自身が決別した画家の世界、それは何を意味するか、が問われます。シートンは画才を、愛する動物を知るために駆使しました。そこであえて、シートンの作品と動物学を紹介する企画展としました。シートンの夢が見えてきます。

シートンが面白い

今泉吉晴

アーネスト・T・シートン（1860～1946年）ほど子どもの心を大切に生きてきた作家は少ないでしょう。作品は文章と呼応する絵が魅力で、装丁に心をそそぎました。



シートン1920.5.15デウイントン邸

シートンは父の命令でオンタリオ美術学校を卒業したあと、ロンドンの王立美術院に進学させられます。そして7年間の特待生になったとき、魂の反抗の叫びを押さえることができなくなりました。

カナダにもどったシートンは1882年、マニトバ州カーベリーの開拓地に入りました。父の圧迫をのがれ、H・Dソロー（1817～1862）のいう経済的に自立した学者をめざしたのです。以来シートンは開拓者、猟師、画家、著者、講演家で生き、父のいう養育費の全額を返済しています。

シカの足跡を追い、開拓によって壊される大草原と動物のくらしを見据えました。すでにバッファローは頭骨がころがっているだけ、先住民は居留地に押し込められていました。

三年にわたって足跡を追った雄ジカと間近に顔をあわせたとき、シートンは撃つ気のない自分の心に気づきました。同時に雄ジカを友人のように知ったと感じました。同じようにウサギの母子を知り、オオカミのペアーのきずなの深さを知りました。シートンは最初の作品を『私が知っている野生動物』（1898年）と題し、あえて特定の個体の個性を描きました。それは親や群れに守られて一人前に育つ哺乳類の成長を明らかにする、新しい科学です。

シートンの姿勢は絵にもあらわれています。画家の津田櫓冬（ろとう）さんはシートンの絵についてこう書きましました。「シートンは動物たちの習性や生態を、言葉や文章であらわしたり、記録するのみでなく、絵でもって写しとる仕事にふみこんでいます（母のひろは）

2010年2月号、一部略」。

そこでシートンはスケッチが素晴らしいのです。動物の足跡は目にほとんどみえませんが、それを見事に描きました。足跡のスケッチから動物の心が読めます。

私は『大哺乳類展』で、シートンの作品の魅力を、動物学への貢献という形で紹介します。また、ワールド・ミュージアムを紹介しますが、それは、都留文科大学で私と学生が市民といっしょに1980年代から始めたムササビ観察会が発展した自然と親しむ運動です。私はこの運動もまた、子どもの心を尊重するシートンの運動、ウッドクラフト・インディアンスにつながることを知りました。

（いまいずみ よしはる・本学名誉教授）



オオカミとイヌの足跡
ウシの頭骨に近づくオオカミとイヌの足跡。オオカミはまっすぐ近づかず、とちゅうで風上にむかい、頭骨をチェックして、もどりもとの進路をたどる。ひくときも用心している、と分かる。イヌはまっすぐ近づいている。すなわち、警戒心が働いていない。イヌとオオカミの気持がわかる。

「動き出した！フィールド・ミュージアム」

上野の国立科学博物館で都留文科大フィールド・ミュージアムが紹介されます

坂田有紀子

この地域交流研究通信の誌面でもたびたび紹介されてきた都留文科大フィールド・ミュージアム構想が、このたび上野の国立科学博物館の大哺乳類展の中で紹介されることになりました。本学は花王や三井物産などの企業と並んで協賛団体として大哺乳類展に参加していますが、単なる協賛ではなく、展示の内容そのものに深く関与しています。本学の名譽教授でフィールド・ミュージアムの提唱者である今泉吉晴氏と、本学地域交流研究センターの北垣憲仁氏の二人が、森の中の動物たちの暮らし（ムリネモトの森の動物たち）に関する展示内容の作成と監修に関わっていることもあり、展示の中で本学のフィールド・ミュージアムを活かした教育活動が次のように紹介されています。

都留文科大は富士山のすそ野に位置する山梨県都留市にある教員養成系の公立大学です。ここには広大な森林があり、自然そのものが博物館という思想でフィールド・ミュージアムを実施しています。

都留文科大フィールド・ミュージアムでは、「自然そのものが博物館」、「地域そのものが豊かな学びの場」という考えを大切にしています。またムササビ観察会などから始まる30年の歴史があります。私たちはムササビなど本物の生きものたちに出会える地域の高さを高く評価する試みを展開してきました。

そして「自然と人をつなぐ、人と人をつなぐ学びの場」としてフィールド・ミュージアムを大学教育にも活かしています。学生たちは教室から地域へ飛び出し、ムササビや野ネズミなど生き物たちや、地域の文化・歴史、暮らし、人など「本物」との出会いを通して、さまざまなことを学んでいます。

都留文科大フィールド・ミュージアムでは、「自然と人をつなぐ」、「人と人をつなぐ」、「交流の輪をひろげ・はぐくむ」ことを大切にしたさまざまな活動をしています。こうした活動とおして本物と出会う地域の高さを高く評価し、地域に愛着をもつコミュニティの創生につなげていきたいと考えています。

実際の展示では、都留で出会える生き物たちの写真や、地域をフィールドにして研究や実践、探求活動をしている学生たちの様子、学生たちによる手作りの雑誌「フィールド・ノート」、奥隆行写真コレクション等が紹介・展示されています。

「地域とともに、自然とともに」、本学のフィールド・ミュージアム活動が蒔いた種が芽を出し大きく成長し始めたことを感じる今日この頃です。

（さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員）

*ムリネモトはムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとって表現したもの。



11月28日に富士急行線との連携事業として、ムササビ観察会がおこなわれました。この観察会の最大の特徴は、「大学生が案内する」ムササビ観察会であることです。学生たちは企画段階からスタッフとして加わり、学生ならではの新鮮な視点で様々なアイデアを出してくれました。3週間にわたる事前学習と準備、練習を重ね、本番は見事ムササビの大滑空が見られ大成功に終わりました。学生やスタッフによる「おもてなし」の心が随所に感じられる温かく楽しい観察会は、自然と人、人と人の交流をはぐくむフィールド・ミュージアムの本質を想起させるものとなりました。



都留文科大学前駅でスタッフの紹介をした

時間と感動を共有した ムササビ観察会

伊東麻里子

「ムササビ観察会を行なう」と聞いたとき、正直、私は完全にお客さんの立場で参加を希望しました。ムササビという動物がいる、ということを知っていたものの、ムササビなんて見たこともなかったですし、当然、詳しいムササビの生態なども知りませんでした。

最初の事前観察会の日、今宮神社に到着し、スタッフみんな黙って空を見上げて数分後、初めてムササビの鳴き声を聞きました。なんとも言えないガラガラとした声でしたが、夕暮れの神社の境内に響くとても素敵な声で本当に感動しました。確実にそこにいることを耳で実感し、その数分後に一匹のム



都留文科大学の教室でムササビの生態を紹介。ムササビの着ぐるみも学生スタッフが自作した

ササビが向こう側へと飛んで行くのが見えました。暗くなった木々の間を、ムササビの大きなシルエツトで、立派な飛膜を広げて飛んでいく姿をはっきりと見るのができました。今度は目で確認することができ、その後は3匹、4匹と続いて飛び立って行きました。私とムササビの初め

での出会いでしたが、その日から私はムササビに夢中になってしまいました。それと同時に、ムササビのことをもっと知りたくなり、もっと色々な人にムササビを知ってほしいと思うようになりました。

観察会本番の日、大月駅に参加者の皆さまをお迎えに行くと、子どもからお年寄りまで、さまざまな年齢層の方々が集まってくださっていました。都留文科大学前駅に到着し、皆さんが私たちに耳を傾け、一緒に笑ってくださったとき、スタッフを含め面識のない40人がムササビをキツカケに都留に集まって、同じ時間を共有できるという奇跡に私はとても感動しました。

参加者の方々のなかには年齢などさまざまな人たちがいらつしゃいましたが、東京から一人で来られていた小学校4年生の女の子と私はお話をする機会がたくさんありました。彼女は、歩いている最中に「紅葉が綺麗だね」と何回も言ってくれました。自分が考えてきた質問や、私たちが作ったムササビ説明会の内容を、きちんとメモしてくれていました。プロミナ（望遠鏡）で映していたムササビの洞を、不思議そうに黙ってずっと見ていてくれました。ムササビの糞を見つけられなかった人のために、たくさん落ちている場所を彼女が教えてくれました。ムササビ観察では「ムササビの目が見られた」と大はしゃぎしてくれました。最後に「また会えたらいいね」と言ってくれました。そんな何気ない会話や行動が、私にとっては最高の思い出になりました。

準備は大変だったけれど、ムササビ観察会に参加して本当に良かったと思っています。今回の観察会の達成感と満足感は今までにないほど気持ちのよいものでした。

(いとう まりこ・本学社会学科・現代社会専攻3年)

フィールド・ミュージアムとの連携事業の取り組みにおける「ムササビ観察会」の開催について

石井謙一

平成20年10月から都留文科大学のご協力のもと社団法人日本民営鉄道協会との合同で、都留文科大学が展開するフィールド・ミュージアム構想と連携した富士急行線の地域沿線活性化事業を推進しています。平成21年4月には都留文科大学前駅の待合室をフィールド・ミュージアムの情報発信基地としてリニューアルを行いました。室内は木材をたくさん使用し、学生さんが製作したパネル、さらに標本や自然に関わる図書や絵本、メダカの水槽を置き、電車を待つ時間も地域の自然を感じてもらえるものになりました。

そして、今年は参加者を募って駅から沿線の実地の自然を見ていただくイベントを実験的に開催し、その結果を次のステップに結び付けて地域活性化を目指していくこととし、イベント計画に着手しました。今回、ムササビ観察会としたのは、地域交流研究センターの北垣憲仁先生と協議をしていたなかで、参加者がフィールド・ミュージアムを体感出来る内容であることをコンセプトにしようということになり、沿線に住み観察が出来、さらにインパクトがある動物として「ムササビ」を選択し、ムササビ観察会としました。また、通常のウォーキングイベントや観察会との差別化を図るため、ガイドや運営は学生さんが中心に行い、また、大学の教室でミニセミナーを開催し、ただ見るだけではなく、「学び」という点からムササビの生態や特徴も理解していた

だいた上で、観察をすることとしました。

さらにエコの視点も取り入れて、場所への移動は全て電車を使用することにし、大月駅から都留文科大学前駅までは観光列車「富士登山電車」をコースに組み込み、イベント内容も付加価値をつけて仕上げていきました。その結果、募集定員は30名限定ではありましたが、イベント内容が珍しいものであったことや「ムササビ」の反応が良かったため募集の数日ではぼ定員に達成しました。

11月28日、天気も晴れて、学生さんの見事な運営、ガイド、誘導により参加者をおもてなしして、ムササビも見ることができ、大変好評のうちに終了することが出来ました。学生さんは運営は勿論のこと、参加者とのコミュニケーションをしっかりとり、その楽しい空間を提供するおもてなしの心には、感動しました。参加者からのアンケートもムササビが見えたこと、一生懸命に運営する学生さんへの印象が良かったとの意見が多かったです。

そして、今年も「ムササビ」や新たなテーマによる観察会を、北垣先生をはじめとするフィールド・ミュージアム部門の関係先生や学生さんと実施していきたいと考えております。また、さらにこの観察会を沿線地域の商品として育てていきたいと考えております。

都留文科大学前駅が誕生してから、昨年11月の5年が過ぎました。駅が誕生し、広告スペースの一

枠を当社が大学に提供したことがきっかけとなり、駅のビオトープやフィールド・ノート「富士急行線特集」の製作、そして、待合室の情報発信基地の整備、富士急行線途中下車の旅冊子の発刊、ムササビ観察会の開催と毎年一歩ずつですが、着実に、大学と当社との連携事業は進化しています。今後もこの関係を継続させ、富士急行線を軸とした沿線地域活性化を目指していきたいと思っております。

（いいい）けんいち・富士急行線交通事業部



今宮神社での観察会の様子。ムササビをとらえて参加者と学生スタッフの交流がうまれた

北垣憲仁氏に聞く 自然との出会いと フィールド・ミュージアムへの思い



イワナの稚魚を捕らえたカワネズミ

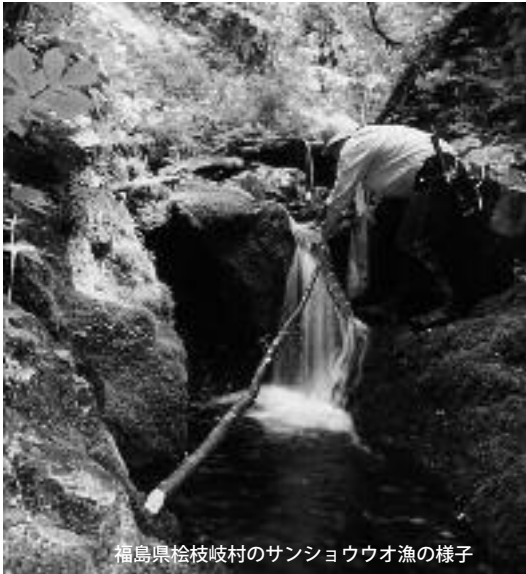
聞き手・西教生（にし）のりお・環境教育GP研究員）2010年3月8日、地域交流研究センターにて

大学に入学して最初に出会った動物について何か思い出はありますか

私は、1984年に都留文科大学に入学しました。あたりを山に囲まれた土地で育ち、子どもころから身近に犬や猫を飼いましたし、さまざまな動物と親しんできました。大学ではぜひ、野生動物の暮らしの謎を解き明かしてみたいと思い、初等教育学科の動物学研究室に入ったのです。大学に入った当初の最大の関心は、動物のことをもっと知りたいという点にありました。

動物学研究室では、身近な野生動物でもじっさいに野外で観察して生活の謎を解き明かした人は少ないこと、いまだにどのような暮らしをしているのかわかっていない動物が数多くいるということを知りました。なかでも、カワネズミという動物は、水中を移動しながら生活をしていると聞き、私たちとは異なる空間で暮らしているその動物の謎をこの目で確かめたいと思ったのです。生きものを飼育するのではなく野外で観察するには、その方法を自ら創り出していく必要があります。野生動物の暮らしも尊重しながらどのように観察すればよいか。この過程の試行錯誤が私にとって大きな学びとなりました。

じっさいに、カワネズミの生きた姿に出会うには2年ほどの時間を必要としました。それだけに初めて生きた姿に出会ったときは、本物に出会う喜びを肌で感じることができました。振り返ってみると、学生時代の私の動物研究は、本物から学ぶ意味を自分に問う経験でもあったのかもしれない。



福島県楡枝岐村のサンショウウオ漁の様子

都留でフィールドをつくるという経験から学んだことはありますか

大学3年生の時、カワネズミの研究をさらに進めるために福島県楡枝岐村に行きました。サンショウウオを捕るという漁があり、漁師がかける罾にカワネズミが入ることがあるのです。そこで漁師について毎日、沢を歩き、罾に入ったカワネズミをいただいてくるというフィールドワークをしました。

そこで出会ったサンショウウオ漁師のかたがたは、毎日、山を歩くことで身につけた自然に関するさまざまな情報を語ってくださいました。ブナの実が豊作の年にはたくさんネズミの姿を目にすること、植物の開花や雪解けの様子を観察しながら漁の開始を決めることなど、漁師のみなさんはじつに広く自然の世界を捉えていると感じました。フィールドとは土地への愛着を深め自らの世界を広げていく舞台ではないかということを経験で学んだのです。

この経験がもととなり都留にフィールドをつくることにしました。フィールドには毎日のように通いますから、ここから私の地域のかたがたとの交流が本格的に始まることになりました。

地域にかかわることで、どのように人間関係をつかっていったのでしょうか

ただ地域のかたがたとお互いに関係を作っていくには非常に長い時間がかかりました。動物の観察をしたい土地をお借りするだけでもそれなりの時間と配慮が必要です。しかし、そうやってできた人間関係はしっかりとしたもので、持続するものだということをフィールドをつくるのなかで学びました。

2003年、都留文科大学に地域交流研究センターが発足し、私は地域で撮影された写真をデータベース化する作業もしてきましたが、さまざまな人に情報を確認していくだけでも、3年ほどの時間がかかりました。しかし、ここで築いた人間関係は途切れることなく、さらに広がっていきました。ゆつくりと時間をかけ、信頼関係を深めながら作ってきた人間関係だけに、思いを共有し、夢を描くこともできました。私はこうした人たちの思いも大切に記憶しておきたいと思っています。

『フィールド・ノート』作りで見えてきたことはありますか

『フィールド・ノート』はフィールド・ミュージアム部門の機関誌です。学生、教員、市民の皆さんのご協力で発行し、2010年で8年目を迎えます。私はこの編集作業を通して、まず学生がより善く生きようとする姿勢を間近で見ることができました。

地域の人と話し、それを自らの言葉で語ることで

喜びと発見に心を揺さぶられたという学生もいますし、編集作業が自分自身を見つめる場となったと語る学生もいました。また、地域のひととの交流で自分の生き方のモデルとなるような人と出会えたという学生もいました。このように、表現するということを通して、自らの生き方を問い直し、成長していく学生とともに編集作業ができるのは私にとって幸せなことです。

現在までに発行した冊子は合計3000ページほどにもなります。これは、地域の生きた記録とも言えるでしょう。自然や人と向き合い、ともに言葉で探求し共感の輪を広げる。ささやかな試みですが、これからも『フィールド・ノート』の取り組みを通してフィールド・ミュージアムとは何かを問い続けていきます。

「大哺乳類展」の展示に参加して何か感想はありますか

ここ1年半ほど、大哺乳類展の準備として都留で集めてきた資料や映像を整理し撮影してきました。それは、哺乳類との出会いに喜び、地域の人びとの出会いから学び、編集に関わる学生の成長からしだいに人間についても大きな関心を寄せるようになった、これまでの自らの進み行きを確認する作業でもありました。

都留文科大学地域交流研究センターのパンフレットには「人間探求」という言葉が冒頭に記されています。「人間探求」の姿勢は、今回の国立科学博物館での展示に込められた想いとも大いに重なるのではないだろうか。個人的な経験を振り返りつつ、いま私はその思いを強くしているところです。

いわむらかずお絵本の丘美術館

岩村康一郎

「大哺乳類展」では、「いわむらかずお絵本の丘美術館」の展示パネルと「都留文科大学での取り組み」展示パネルとが並ぶコーナーがあります。フィールド・ミュージアムの交流ということで、学芸員の岩村康一郎氏に文章と写真をお願いしました。(編集部)

いわむらかずお絵本の丘美術館とは？

当館は、絵本作家・いわむらかずおの個人美術館です。1998年に栃木県馬頭町に開館し、『絵本・自然・こども』をテーマに、絵本の世界と自然の実体験が同時にある場所づくりをめざし、活動を続けてきました。当館は美術館とその周辺の『えほんの丘』と名付けた里山のフィールド、『えほんの丘農場』とで構成されています。

『えほんの丘』は地元の自治体(那珂川町)が遊歩道等の整備をしたエリアで、草原、桑畑、雑木林、竹林、スギ・ヒノキ等の植林地、田んぼ、ため池、篠葎などがあります。

『えほんの丘農場』は地元の家・佐藤幸男さんの農場です。当館の趣旨にご賛同くださった佐藤さんが、来館者の方々に開放してくださっています。畑、放牧場、牛小屋、作業小屋、堆肥置き場などがあり、作付けされている作物の様子を観察したり、放牧されている和牛の様子を眺めたり、周辺に暮らす生きものたちを観察することもできます。えほんの丘農場では、年間6〜7回ほど農場イベントも開催しています。

作家活動と美術館の展示

絵本作家・いわむらかずおは『えほんの丘』で生きものたちと出合いイメージを膨らませ、『14ひきのとんぼいけ』や『栗栖ちくりん』をはじめとする『えほんの丘』を舞台にした作品の創作を続けています。美術館ではこれらの絵本原画をはじめ、構想段階のスケッチやフィールドでの取材写真等の資料を展示し、作家がどのようにして絵本を作り上げていくのか、その過程がよくわかるような展覧会になるよう心がけています。また、企画展では、いわむらかず

おと交流のある絵本作家や写真家の方々の展示なども開催しています。

えほんの丘農場での農場イベント

えほんの丘農場では、たねまき、くさとり、しゅうかく、いねかり、もちつき、などの農場イベントを開催しています。このイベントには友の会の会員様をはじめ、一般の方たちも参加することができます。主に栃木県内や関東近県から参加者が集まっています。農場イベントでは農場主の佐藤さんに話を聞きながら農作業をします。実際にこの地で長年農業を続けて来た佐藤さんに話を聞くことで、農業の本質や課題を知ることができます。また、作物をちよつといただくことやってくる、農場のまわりで暮らす生きものたちと佐藤さんの関係も知ることができます。いつも畑で作業をしている佐藤さんは、畑の中に残された生きものたちの足跡や食痕などから、彼らの行動を鋭く読み取り、その対応をしているのです。

農作業を終えたら、たべごろの野菜を収穫し、かまどに火をおこして野菜を焼いたり蒸したりして調理し、みんなでお昼ご飯を食べます。自分自身の手で収穫したばかりの新鮮な野菜は、格別の美味しさです。農業とその周辺の自然環境の関わりを体感することとは、とても重要なことです。たくさんの生きものが、佐藤さんの『えほんの丘農場』と関わりながら暮らしています。

『えほんの丘』と『えほんの丘農場』でのフィールドワーク

とんぼ池観察会、ホタルの観察会、ムササビ観察会などのイベントも開催しています。えほんの丘では、いろいろな生きものが暮らしていますが、哺乳



右ページ：いわむらかずお絵本の丘美術館
 左ページ右上：えほんの丘農場イベント『しゅうかくしゅうかく』でトウモロコシをたべる子どもたち
 左上：絵本の丘農場を闊歩するイノシシ
 右下：巣穴から出て来た子ギツネ
 左下：巣箱から顔を出したムササビ



類について一部紹介致します。

・ムササビの巣箱

えほんの丘には、ムササビが営巣できそうなうろのあるスギの太木がありませんでした。そこで、今泉吉晴先生のご指導を頂き、ムササビ用の巣箱を作り設置しました。それは、まだ美術館の建築すらはじまっていない開館前のことです。その後美術館が開館して数年たったころ、ムササビやテンが巣箱に入居しました。現在は、巣箱を増設し7戸の巣箱が美術館周辺のスギやヒノキの木に取り付けられています。ムササビは入居と退居をくり返していますが、巣箱はいろいろな生きものたちに利用されています。

・ギツネの巣穴

えほんの丘にはギツネの巣穴があります。日当たりの良い南向きの斜面に、4〜5カ所の深い穴があいていて、どうやら地中でつながっているようです。私たちがはじめてえほんの丘に来た年も、ギツネが子育てをしていました。その後も、春になると子ギツネの姿を確認することがたびたびありました。昨年、自動撮影カメラを巣穴の周辺に設置したところ、タヌキやアナグマ、ハクビシン、イタチなどこのギツネの巣穴を訪れていることがわかりました。この巣穴が、ギツネ以外の生きものにも利用されていたことは、私たちに予想外のできごとでした。

・リスとクルミ

開館前の調査で、沢沿いに大きなクルミの木が一本あることがわかりました。木の下からはリスやアカネズミの食痕がたくさんみつけられました。私たちはクルミの木を増やすべく、フィールド内にクルミ

の苗木を何本か植えました。その後12年たち、成長したクルミの木は実を付けるようになりました。さつそくクルミを取りにリスがやってきたのはいうまでもありません。

・イノシシ

ここ数年は、イノシシが頻りに姿をあらわす様になりました。えほんの丘のあちこちがイノシシによって掘り返され、えほんの丘農場のジャガイモやサツマイモ、ラッカセイなどの作物が一夜にして食べ尽くされてしまうこともありました。農場イベントで収穫を予定していたのに、前の晩にイノシシに全部掘られてしまったときには、大変ショックでした。あめときはイノシシも今晩中に全部掘らなければいけない！と、何かを察知していたのでしょうか？

そのほかにも、カヤネズミ、クマネズミ、ヒメネズミ、アカネズミ、モグラ、ヒミズ、アライグマ、サル、シカ、コウモリなど、いろいろな生きものがえほんの丘で観察されています。一昨年からは、自動撮影カメラを使った生きもの観察が出来るようになり、これによりえほんの丘に暮らす生きものたちの様子がいままでより詳しくわかるようになりました。これからさらに調査を続け、来館者の皆様がいずれの散策に出かけたときに、えほんの丘で暮らす生きものたちに出会うチャンスが増えるように、工夫をして行きたいと思っています。

皆様、お時間があれば、ぜひ『えほんの丘』へ遊びに来て、生きものたちに出会ってください。

（いわむらかずお）『えほんの丘』美術館 学芸員

「大哺乳類展」は、さまざまな機関や人の参加・協力によって開催に至りましたが、フィールド・ミュージアムへの関心も広がっています。ここでは、朝日新聞（主催）の田村慎氏（東京本社文化事業部）と都留文科大学（協賛）の菊池信輝氏（広報委員長）に思いを語っていただきました。（編集部）

「大哺乳類展」の都留文科大学の協賛と企画展示を喜びます

田村 慎

まず初めに「大哺乳類展」にご協賛いただき、厚く御礼申し上げます。2010年は国連が定める生物多様性年にあたり、10月には名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催されます。この展覧会は「生物多様性」をテーマに企画されました。

今年『シートン動物記』で有名なE・T・シートンが生まれて150周年になります。そこで都留文科大学（以下、都留文大）の今泉吉晴・名誉教授に監修をお願いし、先生が所蔵するシートンの全著作コレクションをお借りし、更に動物記に登場する動物の暮らしぶりを迫力ある国立科学博物館の複製で紹介する構成となりました。自然を記録して後世に伝えることで、人々の自然への理解は深まります。シートンは作家、画家、講演者、社会活動家として様々な媒体で自然を記録し、私たちに自然のすばらしさを伝えてくれます。「自然を記録することの大切さ」を伝えることが、この展覧会のテーマのひとつになっています。

もうひとつのテーマが自然観察です。フィールドミュージアム（以下、FM）のコーナーを設け、動物の食痕や糞、巣などの資料収集や展示構成には今

泉先生を始め、北垣憲仁先生、坂田有紀子先生にご協力頂きました。FMは従来のミュージアム（博物館）へのアンチテーゼとして生まれた思想ですが、この展覧会ではあえて「FMを博物館で展示する」ということに挑戦しています。会報誌作りや地域交流も含めた都留文大の広義でのFM活動も合わせて紹介します。

都留文大は文系の大学でありながら自然や動物について学べる学科とコースを有し、敷地内に生物多様性の宝庫である森やビオトープを持ち、そこでフィールド・ミュージアムという先駆的な思想のもとで自然観察ができる恵まれた環境にあります。更に、後世に自然の大切さを伝える教職員や博物館学芸員、自然を守る自治体・自然学校・NGO団体の職員などを多く輩出されていると聞いております。生物多様性は人類にとつて避けては通れない課題ですが、「教育」という面から生物多様性に大きな貢献をしている都留文大が本展覧会に協賛されることには大きな意義があると考えます。会場に来た多くのお客様が都留文大について理解を深められることを願っております。

最後になりましたが、ご協賛にあたって様々な面からご協力頂きました大学関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。

（たむら まこと・朝日新聞東京本社事業本部文化事業部）

謎の大学

都留文科大学が自然博物館構想を進めている

菊池信輝

そもそも大学の名前が名前です。外部の方は今回の件についてさっぱり理解できないかもしれませんが、何を隠そう、この私も去年ここに就職するまで、都留文科大学で地域全体を自然博物館にしてしまうという壮大なプランが進行していようとは思っても寄りませんでした。

しかしながら、諸先生方や職員の皆さん、学生諸君の活躍を見るにつけ、この大学は自然・環境分野で途方もないポテンシャルをもった大学なのかもしれないと思うようになりました。そんなある日、地域交流研究センター長の杉本光司先生からシートン展（大哺乳類展）への協力を打診されました。今泉吉晴先生が監修されるとのこと、広報委員長の立場からしてもこの機会をとらえ、本学のいい面を売り出さない訳にはいかない、と二つ返事でOKしました。

とはいえ、どうやら私に負わされた役割は、理事会と掛け合つて協賛金を得ることにあることがだんだんとわかってきました。後はコンサルタント時代に培った手練手管を使い（詳細は内緒）。今ほとりあえず協賛者として国立科学博物館のポスターや看板に大学名を入られたことにホッとしております。

（きくち のぶてる・本学社会科学部・広報委員長）



今泉訳『シートン動物記』（第1巻～5巻）
童心社、2010年

今泉吉晴氏による
E・T・シートンの
著書と訳書を
写真で紹介します



今泉著『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』
福音館書店、2002年、
(2003年度に厚生労働省「児童福祉文化賞」受賞、
第52回「小学館児童出版文化賞」受賞)



今泉訳『シートン動物記』（第1巻～9巻）
福音館書店、2003年～2006年



今泉監訳『シートン動物誌』全12巻、紀伊国屋書店、1997年～1998年、(1999年度に第35回「日本翻訳出版文化賞」受賞)

見沼フイールド・ミュージアムを

呼びかけける (後編)

大田 堯

大田堯先生（都留文科大学元学長）は、都留文科大学フイールド・ミュージアムに共鳴されつつ、地元埼玉県において「見沼フイールド・ミュージアム」構想を広く呼びかけられ、具体的な準備を推進されています。編集部では、その構想について、昨年（2009年）3月にインタビューを行ないました。本誌16号の巻頭に、その前編を掲載しています。参考までに、前編の小見出しを記しておきます。

・見沼を散策した思い出

・歴史以前の歴史から問題を考えることは人間を考える上で非常に重要なこと

・おれこそ見沼の主だと自覚するような人もいて…これは並々ならぬこと

・見沼の農業青年に有機農業の伝統を受け止めてもらう

見沼は地勢的な意味のセーフティネットとして意識される

行政はというと、見沼というところは先ほどの説明でお分かりになったと思うんですけど、昔、海だったところで、それを徳川幕府が沼にするんですね。350年ほど前に徳川幕府が沼にするんですよ。沼地として、そこに貯水能力がありまして、この貯水から今度は田へ水を、ということになるんですけど、いっただん沼になつたうえで、今度は第8代の吉宗の時代に、水田化するという政策が入りまして、穫れるのはお米ですね。それが始まるというのが吉宗の時代です。

そのときに湿地を水田化するというのは大変なことです。1728年だったと思いますけれど、干拓して用水を完成させるわけです。つまり水田にするには水が要りますので、水を引くわけです。その水は荒川ではなくて、利根川から引くんです。68キロぐらいの用水を引くわけですね。それが大宮のちよつと北から用水が二つに分かれるわけです。それが西縁と東縁（おひぎの）に分かれるところです。分かれていって、西縁、東縁という外縁ができてくる。こういう歴史が18世紀に起こるわけです。

（今日の見学で）説明がありましたように、真ん中を通っている芝川という川が用水と水位が違うものですから、（地図を見ながら）こちらのほうがよく分かるんですが、真ん中を芝川が通っていて、両方、西縁、東縁となる。東のほうが川口で、こちらのほうが、さいたま市になると。こういうふうに150万の消費地市民が取り囲んでいる。こういうふうな格好になっているわけですね。

そして、そういう経過を経ていくんですが、一番みんなが見沼に関心をもったのは、1958年に狩野川台風というのがあります。川口市が浸水するんですね。被害が大きくなる。ところがこれ（見沼）があったために、浸水もそれなりに少なくてすんだという印象が、とくに行政には最も敏感に響いた。これがセーフティネットだと考え始めたのが、見沼を単位として考えるということの最初だと思うんです。

すよ。そういう時期というのは、58年の台風のときからだと思うんですね。そのときからここはセーフティネット、地勢的な意味におけるセーフティネットです。

そういう治水対策、治水管理の対象としての見沼の性格が行政の注目するところとなり、ここへは農業と緑地以外は入れないという調整地として規制が行われた。ところがその規制というのは非常に厳し



くて、建物を建てる時には許可がいるというので、ビニール小屋一つ造るにも許可がいる、その申請に3年ぐらいかかるとか、農民は非常に重い負担を負うわけです。

でも、とにかく一番大きな負担は農産物価格と一般の社会的な商品評価との間の格差ですね。これは最大のものですけれども、にもかかわらずそういう状況の中で、代々の土地を守っていくという農民の方たち、原住民とでも言いますが、本当の守り手ですね。その次に市民が入ってきている。こういう関係になっています。

見沼を自然・農業・子どもたちの教育環境として見つけぬおす

行政は、最初は物理的にこのセーフティネットを守らなければならんということで、ため池として考えるわけですよ。ところがそのことをやっているうちに、今度はため池をかためる、第一調整池、第二調整池と、第四の調整池をつくるのかというようなことをいろいろ計画するという雰囲気の中で、用水そのものを、三面護岸といまして、底をコンクリート、横もコンクリートに固めるという政策が行われようとして、それが始まったのが1980年代です。1980年代に三面護岸ということが行われ始めようとしたときに、初めて市民が気づいた。これはいかん、自然が侵される、と。その運動が起こったのを契機に、ここで第二の自覚が起こるわけです。つまり物理的なセーフティネットに加えて、緑とか環境とかという問題が80年代になって起こるわけです。そういうふうな状況に入った時に多様な人々が入ってきて、多くの地権者が出てきて、利害関係が

いろいろあって、その利害関係の複雑な交流の中で、いろんな人物が登場する。「見沼は妖怪の地である」と言われたのは、そういう理由です。非常に苦労して我々はこの見沼を守っているというような自覚を持った方々がたくさんいらっしゃるんです。

農民はの中でひっそりと、変化が起こるのにかかわらず、その土地を守っている。いろんな工夫をしながら、不満を持ちながら、お上のやることはもうけっこうですと。こういう頭をもった農民が静かに守っている。欲求不満はある。こういうふうな状態です。今朝会いました人もそういう感想を持っていましたけれど、そういうふうなところなんです。

だから、そこで考えてもいいし、最初に述べましたように、やはり原住民を基本において考えますと、いま追い風がきたわけです。今度、金融危機というものも来た。危機が来ることによって新しい声を創る。それに食料自給の問題が非常に切迫した問題になると同時に、それ以前からの環境問題も非常にあらわになってくる。80年代以後ですね。そういう状況の中で、こういう金融危機に陥ると、自然を戻せという風潮がありますので、今は追い風なんです。

しかし、どういふふうにここを守ったらいいかということは、みんな利害がばらばらなために、全体構想が立たないわけです。イメージがね。あっても、まとまらないわけです。そういう状態の中で、フィールド・ミュージアムの提案をしたら、皆さんに非常に反応があるんですね。「それならば良さそうやな」というね。その根拠の一つに、僕が言う場合には、まず緑を守らなければならないという環境問題があるけれども、もっと大事なものは、子どもの遊びとか、そういう問題がありますね。いま大きな変化が起こっていて、土地と自然、水に触れないで子ども



もが育っているというのは、人間が人間に成りかねるという状態なんだから、これを周辺にある学校や教育施設が利用する。こういうことがすぐ必要なんだが、ミュージアムというかたちで、新しい教育環境としての見沼という観点を強調するということを加えていくことがあります。

その次に、いわゆる環境問題としての問題がある。そこに農民のステータスを高められない限り、そういう教育環境もできないし、環境も守れないという問題があるという重層的な状況があるというのが見沼の現状だと僕は思いますね。

非常に省略したかたちで申し上げると、そういう関心が出てきたものですから、思い出したのが都留のミュージアムです。縄文公園にするということから、どうするかという問題になったときに、こんなことは小さく考えないほうがいいと思った。かつて自分は都留市全体をミュージアムにするという構想を考えたことがある^(*)。それを今泉（吉晴）先生も独自に考えておられて、生態関係の方を中心にして展開してくださっていて、今に及ぶまで二十年間かの間、それを発展させてくださっている。そういうことが結びついたんだと思うんですね。そこでまさにつながるんですよ。長らくご無沙汰していたミュージアムと、広い1620ヘクタールの地とが重なってイメージされてくる。これが順序でしようね。

見沼のテーマは日本中にある… 地域生産・地域消費が経済の立ち直りの基本

ただ、僕は見沼だけに注目しているわけではない

ということも、ちょっと付け加えておきます。見沼は日本中にありと。つまり地産者と地産者（消費者）という問題は、日本中にある。いまはそのところを考えると、本当に経済の立ち直りということは不可能であろうと考えています。そういう意味では見沼であると同時に日本じゅうにあるという考えが一つ。

もう一つは地球上の南北問題というのも、地産地消の問題と形は変えてもつながっているということ。



原料を提供したり作り出すところと消費するところですね。あるいは先進国と、いわゆる資源を提供する貧しい国々と。この問題の解決もまた実は見沼が持っている問題と何らかの関連があるのではないかと。そういう規模の問題で、ちょうど金融問題が地球規模の問題であるとすれば、見沼問題は地球規模のそういう問題とどこかでつながりを持っているはずだというように見解は僕の頭にはありますので、見沼、見沼と言っているわけでもないということは、ちょっと断り書きとしては、申し上げたほうがいいと思っておりますけどね。

先ほども申しあげましたように、見沼というのは、第一には物理的な意味のセーフティネットです。地形からして、セーフティネットになっている。これは非常に大事なところだと思います。もう一つは社会的なセーフティネットという観点から問題を考えていく必要があるわけです。それはやはり地産地消の問題にまで発展すると思うんです。

そのところが顔の見える経済にならないといけない。今のようデジタルで、数字で付き合っていると、セリで値段を決めているとか、相場でとか、株でとか、そういう形ではなくて、この品物が確かなものだということを確認してお得意様が。そういうお得意様経済というものの意味を考え直してみよう。

僕は「お得意様経済」と言っているんですが、中小企業家同友会と僕は非常に深い関係を持っています。中小企業の生き方というものを、ここ（大田邸の書齋）で議論するわけですが、その場合、結局のところ、顔の見える経済というものがちゃんとセーフティネットとして成り立っていないと、株の低い低いに依存したりなどしていると、いつ落ち込む

か分からないわけです。ところが顔の見える関係というものは、そこをセーフティネットですべて守ってくれるわけです。まずそこを固めるということが中小企業の場合、大事だと言いがちがあります。そのモデルみたいなものがここ（見沼の地域）には成立している。

というのは、周りに150万の消費者がいて、そして特別なセーフティネットとしてのものづくりの場所というものが南北につながっている。苦心さんたんにして不利な状況の中で生産をしている。このところを動かすという問題は非常に大きな経済問題でもあるし、社会的問題でもあると思うんですね。そこらへんの問題というのは、非常に大事な、つま



り社会的経済的セーフティネットというものがそこで考えられなくちゃならないと僕は思うんです。

人間関係を再生する

そして、その第三の層として、そのさらに下層には、生の人間関係という問題が登場すると思うんです。つまり経済上に顔が見えるというだけではなくて、人間のハートとハートとがつながっているというセーフティネットが一番肝心なものなんですね。ところがそれが今の経済状態の中ではズタズタにされていて、みんな孤独化現象のほうへ向かっていて、自己中心に傾斜してしまっている。こういうような方向になつていくわけですから、これをなんとかして回復しなくてはいけない。これは「生命(いのち)のきずな」という僕のアイデアにつながっていくわけです。とりわけ、すでに言いました大人と子ども、とくに成長中の子どもが自然のなかで大人や友人との間でかわりあう場としての見沼です。命と命をつなぐ、いや生命はかわりのなかにあるという自然の摂理にしたがって生きあつていくことを考えていく。

僕が見沼について考える最後のセーフティネットはそこなんです。そのところを一番基礎において、人間関係の修復、信頼感の回復というような問題を考えたい。ここの妖怪が棲むといわれる異質なものがいっぱい入っているものの中で、人間的な違いを認め合いながら関わり合うという人間関係を築くことができれば、これは本当の意味のセーフティネットになると考えるわけです。ですから、第三層のその部分に重点をおいていくことになるわけですね。

そうなりますと、違うものが共生する。共に生きるという問題に到達するわけです。ですから「孤独から共生へ」、「共に生きる」という方向への生活原理の転換というものが、それとの関係で出てくると思うんです。

僕は、実は正月休みに、テスト問題を少しはつきりと国民、市民に訴えるということでものを書こうと思つていたんです。ある程度、資料を集めていたんです。そうしたら、さつきから言つたような見沼の問題が登場しましてね、こつちがおもしろいんですね。この見沼の問題というのは非常にいろんな違つた思想、情感がいろいろ混ざつていて、いろんなものがある種の共通の目的でそこを守つていこう、その空間を価値ある空間として守つていこうということを目指している。そういう姿はきしみ合いもあるけれど、そこに希望が生まれるというか、夢が生まれるというか、夢とおもしろさというものが、僕は見沼を見つめることの中で得たような感じがするんですね。

見沼を見つめるとね、あのきしみ合いというもののから次の世界のあり方の模索の夢が吹き出しているという感じがしていますから、そういう意味じゃ、僕は希望があると思うんです。そこへみんな目を向けてもらいたい。割に楽しく聞いていただいていると思うんですよ、見沼の夢はね。それはある種の根拠があるからじゃないかなというふうに僕は思っていますけどね。

(終わり)

(*) 大田堯「わたくしの『都留自然博物館』(1983年)、田『地域の中で教育を問う』新評論、1989年、所収、など。なお同書の抜粋が、本誌16号(15頁)に掲載されています。

地域交流研究センター・くらしと仕事部門講演会が開催される 2010年2月2日

「世界の森林の歴史と現状」

石 弘之氏 (前東京大学大学院教授)

2月2日、前東京大学大学院教授の石弘之先生をお招きして、地域交流研究センター・くらしと仕事部門講演会「世界の森林の歴史と現状」が行われました。

石先生は朝日新聞記者を経て、東京大学、北海道大学で教鞭を執られ、アフリカ・ザンビア大使としてのご経歴もお持ちです。記者時代から環境問題、森林問題、またアフリカの開発問題に取り組まれ、著書である『酸性雨』『地球環境報告Ⅰ・Ⅱ』(以上岩波新書)、『地球破壊七つの現場から』(朝日選書)、『環境学の技法』(東大出版会)や訳書である『緑の世界史』(朝日選書)などは本学図書館にも所蔵されています。このたび「若い学生さんのために」と都留まで快く駆けつけてくださいました。

当日は本学学生、教員約20名のほか、林野庁山梨森林管理事務所から3名、富士・東部林務環境事務所から1名の方が参加されました。スライド50枚程度を用いて、熱帯林から極北まで世界各地の森林の歴史をわかりやすくお話しいただきました。以下参加者した学生からの感想です。(泉 桂子・本学社会学科教員)

途上国支援のあり方再考 ―石先生のご講演を受けて

加藤優人

今回、石先生の話聞いて今まで知らなかった多くの自然についての話、世界の人びとの暮らしなどをあらためて学ぶことができました。



いろいろなお話をさせていただいたなかで一番心に残っているお話は、日本のような先進国が、いらなくなった服などを無料で送ることがいいことだと思っただけで送ることが実は発展途上国のひとは喜んでばかりではないということです。先日、テレビを見てみると、某デパートでいらなくなった服を送ることで日本のエコにもつながり、お金に困っている国の国民も助かると言われています。しかし、石先生のお話の中にあつたように、日本が要らなくなった服を無料で送ることでその国で元から売っていた服が売れなくなり、衣服を売って生計をたてている人が貧困に苦しんだりしているということをはじめて知りました。

改めて考えるとその通りですが、そんな風に考えたことが今までありませんでした。今後も、多く日本から送られることがあると思いますが、良い気持ちで行なっていることは本当にいいことなのかを改めて考え直すべきだと感じました。

(かとう ゆうと・社会学科、環境・コミュニケーション 創造専攻3年)



第6回地域交流研究フォーラムが開催される

ようこそ フィールド・ミュージアムへ！

自然と人をつなぐ、人と人をつなぐ、生きいきとした新しい地域社会の創造に向けて

(H19年度文部科学省採択の現代G.Pのまとめ)

2010年2月20日 10時～16時 会場：2号館101教室、102教室、201教室

午前の部は、「山・里・町をつなぐフィールド・ミュージアム」というテーマのもとに、「山で学ぶ」「里・町で学ぶ」「つなぐ・はぐくむ」という三つのパートで、八名の方が報告され、総括の質疑討論が行われました。昼休みには、「大学生や地域の方による展示・交流」が行われました。午後の部は、「亀工房さんによるミニコンサート」と「フィールドミュージアムカフェ」が行われました。市民、学生、教員、職員など参加者層が多彩であり、午後の部には複数の親子も参加されました。参加者は、延べ100余名でした。

「思い」が人を動かす

宮崎高虎

「つながりって何だろう?」、今回のフォーラムの最中、私はこのことに何となくの違和感やつきりしない思いがありました。私が生まれる以前は、携帯電話はもちろんのこと、スーパーや自動販売機、水道の設備などもなかったと聞いています。だからこそ、人は自然から直接的にその恵みをいただき、また人と人は助け合うことで生活を成り立たせていました。

しかしながら、現在の私たちを取り巻く環境は大きく変化しました。大学の周辺には多数のコンビニやスーパーが並び、

共同のアパートの代わりにワンルームのアパートが増え、固定電話は携帯電話に…と、「つながる」ことがなくても生活していける、そんな時代になりました。そして、「そんな時代」が私にとっては

当たり前のものだったのです。「つながる」ことの意味が生活するためであったならば、その意味は、現代では失われたものとなりました。でも私自身は、地域や自然、そして人々をつながりたい、つながっていたい、そう思っている自分に気づきました。なぜそう思うのか、そのはつきりした答えはまだ分かりません。しかしある少年が、それに近いものを教えてくれました。

その少年とは午後の部のフィールド・ミュージアム・カフェの中で出会いました。彼は、現在、野ネズミの観察をしていて、罠をしかけてネズミを捕まえ、飼おうとしているそうです。野生動物と会いたい、見たいという純粋な気持ちとが彼を動かしているように感じました。私自



身も、野生動物の観察をしています。最初のころのようなワクワクした気持ちは薄れ、今ではどうやって周囲の人にこの感動を伝えればいいか、そのことばかりを考えていたように思います。そして、その少年との出会いは、「意味」ではなく「思い」が大切であることを考えさせてくれました。

そう考えた瞬間、頭の中に一つの考えが過ぎりました。「つながりって『思い』ことなのかも」。誰かを思い、地域を思い、自然を思う、それが人と自然を結びつけ、人と人をも結びつけるものなのかもしれません。久しぶりにじっくり野ネズミを観察したいな、それがフォーラム後の私の思いです。

(みやぎき たかこうら・本学社会科学科環境・コミュニティ創造専攻3年)

継続した積み重ねを感じました

長谷川 望

毎年2月の恒例行事となった、地域交流研究フォーラムに今年も参加させていただきました。私が大学を卒業してから本格的に始まった取り組みですが、「フィールド・ノート」が創刊された頃に野ネズミの観察日記を掲載していただいたこともあって、ずっと注目してきました。

今までの実践発表を聴いて、保全が必要である植物や生き物との関わり方、小学校の社会で取り扱う米作りを実際にやってみる取り組み、自然と人をつなぐ雑誌である「フィールド・ノート」の発刊、地域とそこに住む方々との関わりを考え実践するフィールドミュージアムカフェと、どれも学校現場で教員として環境教育を実践していく上で、とても意味のある実践だと感じました。この実践に関わった学生たちが、全国の学校や地域で環境教育の担い手として活躍していつてくれる、そんな期待感をもたせてくれるものでした。

フォーラムでは、現任教員の立場からコメントをさせていただきました。今、自分が関わっていることも含めて、学校を軸として環境教育をどう進めていけばいいのか、日頃考えていることを述べてさせていただきます。現在私の所属する

団体では、静岡県富士市で整備を進めている湿地を生かした自然公園の活用の方を考えています。市民に観覧会等どのように稀少な植物を紹介していくか、予算をどうやって行政につけてもらうか、また学校がどのように活用していいのか、4月の本格的開園にむけて考えるべきことはたくさんある状態です。都留での取り組みを参考に、何か生かせればと考えています。

午後は、ずっと参加したかったフィールドミュージアムカフェに参加することができました。亀工房さんの心が和む素晴らしい演奏と、学生たちの地域とどう関わっていききたいかという想いを聞いて楽しむことができました。次回も、都合がつけば参加したいと思わせる素敵なカフェでした。

まだ、これからもずっと続いていく実践だと思っています。今後も地域との繋がりを大切にして、実践を積み重ねていくことを期待しています。

(はせがわ のぞむ・初教卒 富士市立原田小学校教諭・富士自然観察の会運営委員)



地域交流研究センター「暮らしと仕事」部門「地域再生」のための学習会

「市民に学ぶ、農のある生活第二弾」

松野公紀

タイミングが、大切だ

前期に引き続き、後期も、大月市在住の藤本兼三さんに、畑との付き合い方についてお話をいただきました。前回の学習会が、「農のある生活哲学編」とすると、今回の学習会は「実践編」。新しい種類の野菜づくりにも次々と挑戦なさって、ご自身の農法を確立されていることに、学生たちは感動を覚えたようです。受講したSocial料圖'sのメンバー二人に感想を寄せてもらいました。

(編集部・田中夏子)



共同畑で育てた白菜やサニーレタス



去年の秋に行った焼き芋大会で撮った地域の方々と

2009年10月19日、夏以来の藤本兼三さんとの再会でありました。今回は、藤本さんの実践をもとにした「野菜の育て方」についての講演でした。種まきから、収穫までに共通することは、「タイミングが大切」ということでした。

私は、藤本さんのお話の中で「タイミングが大切」であるということが強く印象に残っています。例えばある野菜を育てる時は、種を植えて苗を育て、畑の土を起こし、育てた苗を畑に植え替え、作物のために畑の「害虫」を取り……といった過程を経て収穫にたどりつくことができます。このすべてを決めているのは、畑に存在する「自然」であり、この「自然」の動きを感じることで、畑を楽しむために必要だと思いました。

ただ、畑におけるタイミングをつかむことは容易ではないと思います。多くの失敗を重ねながら徐々に感じ取っていくものだと思います。そのためには、できる限り多くの時間、畑と触れ合わなければなりません。

今回、あらためて畑を楽しむことの基本を藤本さんのお話から得ることができたと思います。ありがとうございました。

(まつの こうき・社会学科 現代社会専攻2年)



①：ご自身で育てているズッキーニを手にとり、栽培方法を説明する藤本さん
②：藤本さんが取り出す珍しい野菜に見入る学生たち（写真はいずれも、第一回学習会のさい撮影したもの）

野菜への感動

太田真紀

2009年7月に引き続き、2009年10月19日に、大月市にお住まいの藤本兼三さんが第2回目の講演会をして下さいました。

第1回目は藤本さんの畑に対する考え方等のお話でしたが、今回は具体的な野菜の育て方のお話をして下さいました。藤本さんは、本当にたくさんの種類の野菜を育てていらっしゃって、私たちが抱いた疑問に対して、何でも丁寧に答えて下さいました。

藤本さんが育て方を教えて下さった野菜の中で、私たちが一番興味をもった野菜は「コールラビ」という野菜です。この野菜は、キャベツの仲間であり、見た目や味はカブにとっても良く似ています。実際にその場で、藤本さんが育てたコールラビを食べさせて頂きました。私はその時、生まれてから19年間味わったことのない味に出会うことができました。

それと同時に、まだ見たことも聞いたこともない野菜が、自分の身近で育てられているということに、感動を覚えました。

私は、野菜に対して感動を覚えるなんて、滅多にない経験だと思っています。今回の講演会でそういう経験ができたことを本当にありがたく思っています。藤本さん、本当にありがとうございました。

（おおた まき・初等教育学科2年）

フィールドインターンシップ報告—その2—

前号に引き続き、社会学科環境・コミュニティ創造専攻三年生が、今年度実施したフィールドインターンシップの修了報告です。インターンシップは、通常5日から10日のプログラムで、研修先は、NPO、NGO、環境教育団体、地域づくり組織、メディア関係等、多岐にわたります。研修期間を終えた後も、継続的に研修先に通い続け、問題意識やスキルをさらに育てているメンバーも出てきました。今回の報告からも、実地の、緊張感ある学びや仕事経験が、豊かな発想と行動力をもたらしてくれる様子がうかがえます。(編集部・田中夏子)

フェアトレード商品の普及に関わって—パルシツクでの研修を終えて

近藤成将

私は「パルシツク」という東京にあるNGO法人で2週間程のインターンシップを行ないました。そこは「フェアトレード(先進国、途上国間での平等な貿易)」という活動やイベントなどを通して途上国、主に東ティモールやスリランカといった国の発展や国際的な地位の向上を目指す活動を行なっています。私がここをインターンシップ先として選んだのは「フェアトレード」というものに興味があり、具体的な仕組みや問題点などを知るためにもこういった活動を現場で実際に見てみたいと思ったからです。

私が実際にした仕事というのは主に都



内にあるフェアトレードに関するお店を回るといふもので、内容は各店舗でイベントの紹介をしてそれとともにパルシツクで扱っている商品の宣伝もするというものでした。とても緊張する大変な仕事でしたが都内の様々な商品やお店を見ることができ、とても貴重な体験ができたと思っ

す。また事務所の方から空き時間に直接お話を聞くこともでき、大変だと思ふこともありましたが、短い期間に本当に多くのことを学べた充実した2週間でした。

(こんどう なりまき・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年)

自分に響き、糧となるNPOでのインターンシップ

神谷 彩

今回、私は特定非営利活動法人グラウンドワーク三島(以下NPO法人GW三島)でのインターンシップに参加させていただきました。実践的な環境改善活動を展開している団体です。ここでのインターンシップで、私は実際に現場へ赴き、そば畑づくりや竹の間伐、河畔林再生のための植林、川の堆積土撤去及び外来種の除去、自然観察会などさまざまな活動に参加しました。これらの活動を通して、地域資源を活用して環境再生をするためには、経済循環のしくみをつくることや人と人のつ

ながりが生み出す力が必要不可欠であることを学びました。また、普段の生活では関わりを持つことができない方々と接する機会もあり、たくさんの情報を得ることもできました。

一方で、自分自身の原点は何であるのかを見つめなおすきっかけになりました。そして、自分たちの小さな活動を継続していくことが、人の心を動かすということを実感しています。

NPOの特徴は、「目の前にある事実を自分の肌で感じて探り出し、自分の頭で考え、実際に行動してみること!!」このことが、一番シンプルに自分へと響き、糧となっていくと私は考えています。ここでの経験を生かして、これからも自分からあらゆることに挑戦していく気持ちを大切にしていきたいです。

(かみや あや・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年)



地方紙の醍醐味を実感 ―自ら取材を体験できた 十勝毎日新聞社での研修

前川 保

十勝毎日新聞社の編集局・地方部で体験させていただきました。取材は同部の記者と同行しましたが、デスク会議や整理部、印刷現場など新聞業務の一連の業務もほぼ全部見学しました。一日の大半かな流れは次の通りです。地方部の打ち合わせ（今日の取材予定と出稿予定の確認等）↓取材同行しメモをとる↓記事を書いて添削してもらおう↓反省。後半は見守られながら、自ら直接取材することもできました。書いた記事は同行記者のご

厚意で新聞に掲載されました。

私が直接取材出来たのは、十勝毎日新聞と取材相手との信頼関係があったからであり、それこそが地方紙の醍醐味であると改めて認識しました。最終日、私が住んでいた町の支局に駐在経験のある社員の方と、地元トークで盛り上がりました。また、中学時代に職業体験でお世話になった方が、私を覚えてくださっていました。小さい新聞社であるからこそ、地域の住民との距離の近さを自ら体験することができました。最後に、社会部に都留文科大比較文化学科の卒業生がいらつしやいました。

（まえかわ たもつ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年）



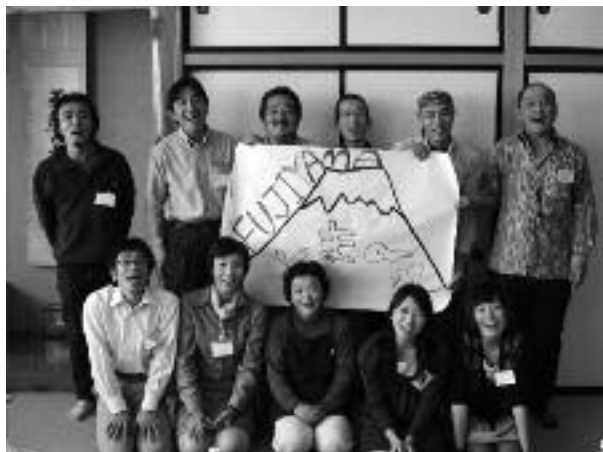
P34上：東ティモール独立の記念イベントコンサート
P34下：箱根西麓のそば畑にて肥料をまいている姿
P35上：取材中に撮ったもの。写真は使ってもらえなかった
P35下：研修先で主催する鳴沢村での耕作放棄地再生のためのプログラムに参加。

フィールドインターンシップを通じて、研究課題が明確に

山田育与

私の研究テーマは、「グリーンツーリズムの運営手法を学ぶ」ことでした。五月半ばおよび八月二十日から二十四日まで七日間、NPO法人「えがおつなげ」の活動に参加をしたことは、次の三点で意義あることでした。

第一は、グリーンツーリズムの土台となる農業の生産活動についてその難しさや留意すべき点を学ぶことができたことです。例えばトウモロコシの収穫の際に



は、出荷の適期の見極めの難しさ、決められた量を実際に出荷するための作業の大変さ、また検品の厳しさを体験することで、グリーンツーリズムの土台となる農業生産活動の実態や消費者の動向に目をむける必要性を感じました。第二は、自分にとって未知である農作業に対して、その膨大な作業をこなす際、どうやったら主体的に取り組めるか、という点です。ともに取り組む人たちの関係づくり、コミュニケーションや作業の工夫によつて、意義・意味を見いだすことが可能だとわかりました。第三は、グリーンツーリズムという研究課題のもと、これから自分が何を勉強していきたいか明確になってきた点です。「えがおつなげ」の活動には様々な立場の人が参加していますが、その中で合意形成をどのようにやっていくか、また、エコツアーへの参加者の動機も多様ですが、その考え方の分析も必要と感じました。ツアーの実施後、参加者の感想や変化を、その後の企画にどう反映させていけるかも考えていきたいと思っています。

インターンシップ終了後は、県内の耕作放棄地の活用の方をめぐって、地元農業者を中心に構成される検討チームに入り、地域農業の現状や、都市・農村交流のプランづくりに加わっています。

（やまだ いくよ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻3年）

NPO法人都留環境フォーラムを設立する

設立記念講演会を2009年11月19日に開催

加藤大吾

「還元する」という使命感

環境に配慮した家を自らの手で建築、定住。1年目には自然農による畑を開始、3年目には無農薬有機栽培の田んぼを開始、今冬は猪の罫猟に挑戦中。来春からは合鴨農法にする予定です。この暮らしの形に最終型はありませんが、資本主義経済の中で幸せ感とまた一味違った生態系の中で人間が生きていく心地よさを身体で感じる事ができます。この4年間でゆつくりとですが都留の環境観を育めたと思います。

自分が得たものを社会に還元する…どれだけ私が生態系の中で暮らす事ができたとしても、完全自給自足できたとしても、ただそれだけです。このような暮らしがよりから得た内面的な感覚、価値観の変容、物質的な情報など、地球環境にとって必要なことは伝えていこう。

虹色のメンバー

「環境教育の先輩が都留に引越してくるらしい？」そんな噂を耳にしました。この人が都留文科大教授の高田研さん(幹事)です。環境教育的な事業を大学や企業と連携し、同大非常勤講師であり宝の里ネイチャーセンターの学芸員でもあ

る佐藤洋さん(副理事長)とともに環境に関する事業を実施するに至りました。そこには有能な大学生の河野格さん、高見滋さん、白戸溪子さん(発起人)の姿もありました。更に地域活動から歌手でムササビの保護活動をしているしらいみちよさん(理事)と出会いました。また、高田さんの研究室の隣には同大教授の渡辺豊博さん(幹事)がいたのです。5人集まれば環境関係の話して盛り上がり、夢と希望は膨らみました。更にはコーチングの仕事先で出会った仲間から「都留に住みたい」と申し出を受けるのです。ビジネス一筋でやってきた女性2名。杉浦ひろみさん(理事)と長塩綾さん(理事)です。こうして、当NPOの役者が揃ったのです。

全体としての環境活動

都留市には多くの環境活動団体があり、さまざまな活動が展開されています。私たちはそのような各種団体をネットワークし、環境に関する情報の発信基地としての役割を担いたいと思っております。その結果それぞれの団体間に協働が生まれ環境プログラムの質と情報量が向上するのです。多くの市民と団体に入会して

いただき、誰でもNPOの活動に参加できる体制を作っていきます。

都留市で生まれ育った方たちは、私たちに到底かなわない暗黙知を握っていると思います。そして私たちは都会で育んだ違った視点を持っています。この2つが融合することで日常に埋もれた文化や自然環境を再発見でき、地域資源とし

て都留をブランディングできると考えています。そして行政や企業と手を結ぶことができれば、環境を動かす大きな力になるのです。

ご入会の案内↓<http://forum.org/>年会費・団体10000円(個人3000円

(かとう だいご NPO法人都留環境フォーラム 理事長/ピースライフワーカー)



理事長などスタッフによる、公開会談。当NPOメンバー間だけでなく、会場の参加者との双方向のコミュニケーション活発に行われました

都留市住民をはじめ、市議会議員や、近隣行政区からの市役所職員など、多彩な顔ぶれの参加者

食育と尿中塩分量について

地域交流研究センター・プロジェクト研究

吉住典子

2005年に食育基本法が制定され、それを受けて2006年に都留市でも「つる食育推進プラン策定委員会」が設置され、そのプランを策定しました。委員会の議長を引き受けて会議を重ねましたが、会議資料から都留市の問題点が浮かび上がってきました。問題点の一つが生活習慣病であり、その中で病院受診者数調査での「高血圧患者」がダントツに多いことでした。高血圧の原因は食塩と思っていましたから、お茶請けに漬け物を食べ

る都留市民の習慣から考えてそのことは当然と思い、高血圧関連の研究を思い立ちました。安価な尿中塩分量の測定機器（朝一回の測定で前日一日分の塩分が測定できる…2万円/個）を知ったことも実現への第一歩でした。

専門書を読むと、高血圧の原因は多量の食塩摂取とされているものが多く、血圧測定を中心に研究が進められていました。その詳細な研究では、0.5g/日の減塩食を7日間摂取し、次いで14・6g/

日の高塩食を7日間摂取したときの平均血圧の上昇が10%以上上昇する場合を食塩感受性群といい、血圧上昇がこれに満たない群を食塩非感受性群としています。しかし、食塩感受性高血圧は危険因子を伴いやすい病態



被験者の皆さんの尿中塩分量や血圧データを分析

であるので、的確に診断し、臓器保護を念頭においた治療を行う必要があります。日常生活での実験には適さないという問題点を抱えています。

一方、食塩感受性の差は腎Na（ナトリウム）排泄機能と尿中塩分量と密接に関連していることが知られています。

そこで、実態調査として、2007年度に大学職員5名、市役所職員5名の健康者である被験者を得て、7日間一定カロリー（約1600キロカロリー/日）で一定減塩（6g/日）の食事を提供し、その次の日の朝に尿中塩分量、および血圧測定をしてもらいました。結果として、7/10名が提供食事の一定塩分摂取で一定量の尿中塩分であることが得られたのです。つまり、逆算すれば、尿中塩分量を測定すれば摂取カロリーまで推測でき

ることを意味するというのが分かりました。血圧には何の変化もありませんでした。そこで、2008年度に被験者を30名（大学職員等15名、都留市役所職員15名）、2009年度に被験者を20名（大学職員10名、市役所職員10名）の被験者を得て本実験を実施し、データを蓄積しました。被験者に高血圧者、高血糖値者も導入しました。その結果、提供食で摂取食塩量が一定ならばやはりほとんど一定なのですが、年齢が高い高血圧者の場合、尿中塩分量が摂取塩分量よりも多いのです。現在はその意味を解釈している最中です。しかし、摂取塩分量による血圧変化はみられません。

日常生活の中で自分の健康管理手段を見つける手法の発見に手助けを頂いたことをこの場を借りて感謝の意を表します。2010年度は一般市民の方にご協力を得てさらにデータを蓄積し、日常生活の中での健康管理手段を確立したいと思っています。

（よしずみ のりこ・本字初等教育学科教員



データを前にした著者

日の高塩食を7日間摂取したときの平均血圧の上昇が10%以上上昇する場合を食塩感受性群といい、血圧上昇がこれに満たない群を食塩非感受性群としています。しかし、食塩感受性高血圧は危険因子を伴いやすい病態

【お詫び・訂正】
16号の記事に、編集ミスで間違いがありました。執筆者及び読者の方々にお詫びし、訂正いたします。
16頁
・本文上段8行目（誤）河口湾（正）河口域
・本文下段5行目～6行目（正しくは次の1）の文章が入ります
「の構成も複雑になり、見沼の代表的な「馬場小室山遺跡」は土地利用が安定し2000年継続します。
わたしは縄文時代の「馬場小室山遺跡」と出会い、その保全に
・本文下段14行目（誤）地域遺産（正）地域資産
32頁
・本文執筆者名（誤）もちつき のりこ（正）もちつき のりこ
34頁
・リード文の2行目（誤）お二人が（正）四名の方が

都留文科大学地域交流センター地域教育相談室主催 「第2回公開講座」(2009年11月5日)に参加して

川上博行



I部では、品田笑子先生による学級づくりに活用するショートエクササイズを体験しました。講座開始前から少し緊張感があった教室内ですが、ほんの数分の間にガラッとリラックスした雰囲気になりました。もう立派な大人である私たちですら、たちまちエクササイズの虜です。学校現場で子どもたちに活用したいという気持ちが強くなりました。

II部では、「現代の子ども達の実態と非行問題」というテーマで河村茂雄先生にお話していただきました。教師になるうえで、「非行」は向き合わなければならぬ深刻な問題です。しかし、正直、非行は怖いというイメージがありました。

前半の内容は、非行少年の現状、非行少年になるまでの過程、非行少年になった後の姿でした。非行少年の考え方、非行少年が抱える問題など、今まで私が生きてきたなかでは知り得なかったことばかりで、とても刺激を受けました。なかでも、サブカルチャーの存在が非行少年に大きな影響を与えていることは衝撃でした。また、非行少年の抱える問題の一つに、対人能力の低さがあることを知り、

問題を起こす前に教育の力で援助できなかったことを悔しく思いました。

後半は援助についてでした。非行の1次から3次までの援助ニーズレベルと各レベルの子どもの実態、さらにその実態に合わせた援助について教えていただきました。先生が声を強めておっしゃった「1次・2次レベルでどれほど対応できるか」という言葉には、「決して3次レベルにさせてはいけない」という強いメッセージを感じました。

また、非行を抑制するものとして、社会的絆の重要性を覚えていただきました。周りの人との絆の強さを当人に実感させることが、少年を救う手立てとなるということでした。それは少年に限らず人間誰にとっても大切なことです。教師としてだけでなく大人としてそのような基本的なことを見落とすことのない関わりを心がけたいと思いました。

講演後品田先生がおっしゃったように、前半は深刻な現実と向き合うため暗い雰囲気となりましたが、話が進むにつれ一筋の光明が見えてきた、そんな講演でした。そして、比較的援助レベルが低いであろう小学校教育の重要性を感じました。小学校から子どもたちに社会的スキルを積み上げ、中学・高校へと繋げていける指導をしたいと強く思います。

(かわかみ ひろゆき・初等教育学科4年)

『谷の町・史の里^{ふみ}益子亮写真展〜思い出の記録・時代の記憶〜』を開催して

会期.. 2009年10月27日〜11月8日 場所.. 都留市立図書館閲覧室

青池恵津子

「記録」と「記憶」をテーマに、写真と図書館の蔵書を展示してふるさとへの歩みを振り返る『谷の町・史の里展』も4回目となりました。

今回は、長年地域の高校教育に尽力された益子亮さん（1915〜1999）によって、昭和20年代後半から40年代初

期にかけて撮影された写真と、益子家のアルバムに残された当時の写真を使わせていただきました。それらの多くは一家の子どもたちの成長記録や行楽・学校生活等きわめて個人的なものではありませんが、そこには戦後の復興期を経て日本の高度成長期に連なる私たちのま

私たちが営んできた暮らしが重なります。歳月は流れ、地域の風景や生活スタイルは大きく様変わりしました。けれど、過去を振り返り、現在の暮らしやふるさととの未来について人びとが語り合い、思いを分かち合う手がかりとするのなら、写真は単なる「思い出の記録」ではなく、

「時代の記憶」として市民の共有財産になるでしょう。開催にあたり、益子家ゆかりの方々はじめ多くの方から写真にまつわるエピソードや情報をおうかがいしました。例年にも増して大勢の方々がお誘い合わせてご来場くださいました。写真に写った人び

とが長い年月を隔てて再会する感動のシーンも見られました。市民の皆さまのご協力で企画が充実し盛会となりましたことに感謝申し上げます。なお、図書館が展示の観覧者で賑わい、読書中の方々はご迷惑をおかけしましたが、交流や集いの場を提供することも図書館の仕事とご理解いただき、ご容赦くだされば幸いです。

（※）益子氏の写真については『地域交流センター通信』No.14に既報

（あおいけ えつこ・都留市立図書館司書）

展示紹介1 『家族』

昭和27(1952)年〜39(1964)年

〜ある家族の思い出と図書館蔵書でたどる時代の記憶〜 より

「お天王さん」 昭和28(1953)年ごろ 栄町



谷村の7月15日は御嶽神社の祇園祭り「お天王さん」。毎年「お天王さん」が終わると夏休みも間近

<展示本> 『ちひろの昭和』 竹迫ゆうこ 編著 河出書房新社 2009年 (いわさき) ちひろの絵のなかには、子どもたちがたくさんいて、歓声を上げて駆け回っている。…絵のなかで、少女はまっすぐに何かをみつめ考えている。…子どもたちは、未来への希望に満ちて生きている。(本文抄)

展示紹介2 『谷の町・史の里』

昭和30年代初期〜42(1967)年

〜写真と図書館資料でたどるまちのあゆみ〜 より

「駅」 昭和30年代中ごろ 富士急行線谷村町駅



学生服姿の男性は都留大生か? 1966年、大学が現在の田原の地に移転してもなお、2004年に「大学前駅」ができるまで全国各地から集まった学生はこの「谷村町駅」から大学生活をスタートした。

<展示本> 『都留文科大学創立五十周年記念誌』 2004年 菁莪育才(せいがいいくさい): 都留大初代学長諸橋徹次博士が学訓として選んだ言葉。『詩経』の「菁菁者莪(社会有為の人材を育成する楽しみを詠んだもの)に由来する。県立臨時教員養成所に始まる都留大の歴史は、市立都留短期大学(昭和30年開学)を経て昭和35年、四年制大学に昇格、数多くの教員を養成し現在に至る。



●● 編集後記 ●●

○巻頭文は臨床教育学の開拓に向かっておられる田中孝彦氏にお願いしました。田中氏は、A.クライマン(医療人類学)の、(慢性の「病い」を抱えた人の)「人生の全体的経験」の「語り」に耳を傾けるという方法意識と(医療の)「専門職」養成の現状に対する批判とに共鳴されています。そしてそのクライマンに重ねながら、ご自身が年月をかけて探究されてきた臨床教育学と教師養成の方向について語っておられます。ここで言われている問題意識は、地域交流研究センターの「発達援助部門」を超えて共に検討されるべきものと思われまふ。

○第1特集は、広く地域の学校に関わる諸実践をとりあげ、その実践・交流の深まりをありのまま見ようとしてまふ。SAT(学生アシスタント・ティーチャー)の実践が、大学と地域との間に成り立つ制度として定着し、深化していることが印象的です(4~8頁)。光ファイバーを使った遠隔交流授業の実験的実践も、新たな段階に入りつつあることが分かります(9頁)。『都留市環境副読本』の記事にある、地域の先生方にとって「<地域>と<自然>は、身近なようで実は遠い存在である」という気づきには引きつけられます(10頁)。こうした諸実践によって都留文科大学の教育・研究自身がゆたかになっていくという関連も見えてきます。

○いよいよ開催を迎えることになった「大哺乳類展」を第2特集としてまふ。監修者である今泉吉晴氏はシートンの著作をとりあげ、「…それは親や群れに守られて一人前に育つ哺乳類の成長を明らかにする、新しい科学です」と紹介しています(14頁)。この企画展とともに、私たちは、「弱肉強食」とは異なる原理について思い巡らしてみたいと思ひます。

○「大哺乳類展」は都留文科大学も協賛し、さらに企画展示そのものにも参加することになりました。そのことにより、朝日新聞、「いわむらかずお絵本の丘美術館」などの新たな交流を共有することになりました(20~21頁、22頁)。

○この企画展の素地の一つである都留文科大学フィールド・ミュージアムに改めて光を当てましたが、富士急行線との連携事業の報告「時間と感動を共有したムササビ観察会」(16頁)は、読んでいて引き込まれます。

○大田堯先生のインタビュー「見沼フィールド・ミュージアムを呼びかける(後編)」(24~28頁)は、シートンのメッセージの現代的な展開として響いてきます。

○次号は、「都留文科大学と地域交流の実践」を特集する予定です。